1981年7月20日発行（毎月20日発行）第2巻 第10号 1980年1月19日 第三種郵便物認可

フィラスティン

# びらーでぃ 7

PLO Magazine: Filastin Bilad

## 中東・パレスチナ問題の情報誌

No. 20 July 1981

緊急特集 イスラエルの「核戦争」

〈対談〉**イラク原子炉爆撃事件をこう見る** 板垣雄三 佐藤栄一

〈特別レポート〉**イスラエル・南アの「原爆同盟」**

**PLOの立場から**（拝啓関係各位殿、VISION） ハミード駐日代表

〈新連載〉絵で見る**イツコのアラビア語講座** 牟田口義郎氏の語る 平田伊都子

短篇小説 「青年の負傷」 イブラヒム・アル＝アラム

学生の見たパレスチナ問題 「エルサレムで出会った人びと」 神田誠司

〈グラビア写真〉「エルサレム点景」 中村晴彦

「パレスチナ略奪物語」 鍵和田良輔

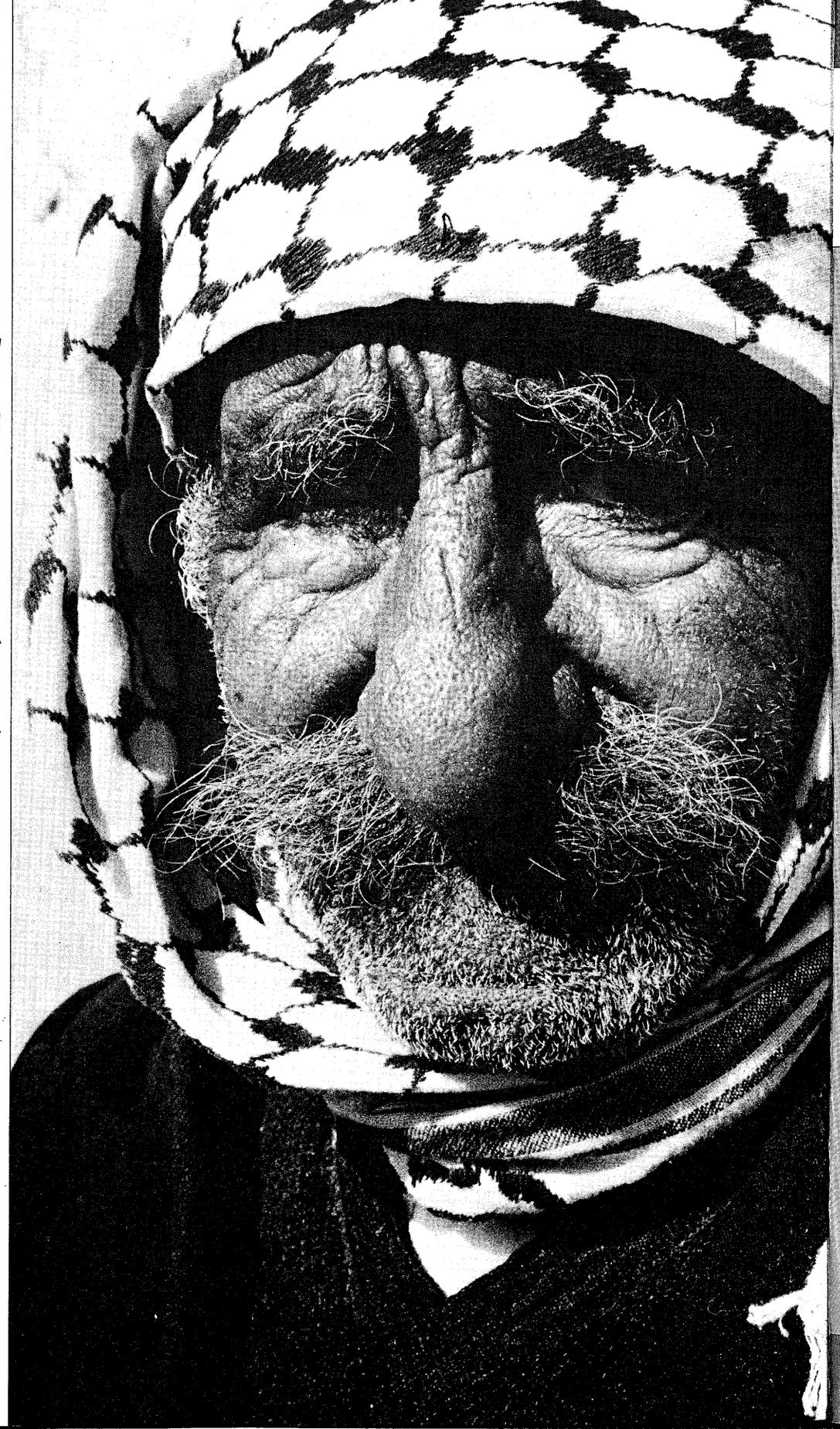
「PLO駐ベルギー代表の暗殺」 ほか

# 「エルサレム点景」

中村晴彦

この七月二十四日から三十一日まで、東京都美術館（上野）で、広河隆一氏と中村晴彦氏の合同写真展「パレスチナの人びと」が催される。それに先がけて本誌では中村氏の写真を紹介することにした。中村氏は一九七二年から七五年までエルサレムに住み、急激に変化するこの街の表情をシャッターでとらえてきた。その写真は、エルサレムの内奥の苦悩と崩壊のさまを映し出している。

Photo by H. NAKAMURA



## パレスチナ人の生活—⑨—

## ——鍛える——

パレスチナ人の青少年は、スポーツが好きだ。彼らにとって体を鍛えることは、革命に役立つ人間を作ることともつながっている。パレスチナ人の空手は、日本で修業したアハマドさん（写真後方）が、レバノンを中心に訓練教室を作ったことで、急速に広まっていった。彼の弟子たちは、毎年日本で催される各種試合に参加するため来日している。

正統派ユダヤ教徒とイスラエル軍戦車。

正統派のユダヤ教徒が多く住むエルサレムのメア・シャリーム地区。彼らは伝統的な生活慣習をかたくなに守り、イスラエル建国にも反対し続けている。壁には「ナチはわれわれの体で石ケンを作った。イスラエルはわれわれを使って金もうけをしようとしている」と書かれている。

＊〈フィラスティン・びらーでぃ〉とは「パレスチナわが祖国」という意味です。

## 今月のことば

イスラエルがさる六日七日にイラクの原子炉を爆撃したことは、イスラエルの侵略的な政策が、パレスチナ人民のみならず全アラブの脅威となっていると指摘してきた我々の発言が、いみじくも的中してしまったことを物語っている。アメリカの最新鋭爆撃機を使って行なわれた攻撃は、イラクに対するものであるのみならず、全アラブ人民へ向けられたものである。

これによって、イスラエルが中東全域の平和と安定を脅かしており、アメリカの支持のもとに、アラブ国家に対して覇権を確立するのが、そのネライであることが明らかとなった。

イスラエルの爆撃下で生きるパレスチナの少女（レバノンで）。


1981年7月号
Vol. 2 No. 10
フィラスティン びらーでぃ


目　次


〈グラビア〉エルサレム点景 ……中村　晴彦……1
**NEWS & REPORTS**
イスラエルがイラク原子炉を爆撃……6　PLO＝ルーマニア共同声明……8
追放された市長ら再び北米の旅へ……9　ブリュッセル駐在PLO代表の暗殺……10
緊急特集＝イスラエルの「核戦争」
〈1〉**イラク原子炉爆撃をこう見る**
〈対談〉板垣雄三・佐藤栄一 ……14
〈2〉**イスラエル・南アの「核武装同盟」**……20
牟田口義郎氏が語る **中東取材25年**……24
新連載 **イッコのアラビア語講座①**……平田伊都子……38
学生から見たパレスチナ問題④ エルサレムで出会った人びと……神田　誠司……42
〈短篇小説〉青年の負傷　イブラヒム・アル＝アラム（真里みどり　訳）……30
〈マルハバ〉タンザニア大使夫人　シキナ・ハッサン・ディリアさん……34
パレスチナ略奪物語シリーズ⑥ バクー油田とロシア革命……健和田良輔……46
今月の詩　わが詩よ／ラシド・フセイン（関場理一　訳）……29
拝啓関係各位殿　**パレスチナと日本⑥ヒロシマの影**……13
〈インタビュー〉新しくPLO執行委員に選ばれたM・アバス氏……52
〈ヴィジョン〉**イスラエルの戦略**……F・アブドルハミード……50
〈パレスチナの声〉**アラファト議長は語る**……51
●カセット　小高正直前駐シリア大使ほか…12　●ファイリング……40
●書評……45　●読者の声……48　●ダイアル・ローグ／編集室……49
●パレスチナ問題を英語で読むための事典⑥……37
●パレスチナのこどものあそび⑧サッカー　絵と文　ウラジミール・タマーリ…表3
パレスチナ人の生活⑨〈鍛える〉表2
ポスター・ギャラリー③表4



＊カット＝ブルハン・カルクトリイ、ナジル・ナバーほか
＊写真　広河隆一、児島盛之、UNRWA、WAFA　＊表紙デザイン・高頭祥八

エルサレム郊外のアラブ人の土地は、年々没収されて、ユダヤ移民のための近代的なアパート群に変わっていた。かつては牧草地だった工事現場に坐るパレスチナ人の羊飼い。

# イスラエルがイラク原子炉を爆撃

## 国際社会への重大な挑戦

### PLOが非難声明

さる六月七日にイスラエルがイラクの原子力研究センターを爆撃し、原子炉を破壊した暴挙は、中東・アラブ諸国のみならず全世界に大きな衝撃を与えた。

PLOが六月八日に発表した声明は、最も厳しい言葉でイスラエルの侵略と原子炉爆撃を非難した。イスラエルの侵略政策がパレスチナ人民のみならず、アラブ全人民にとって重大な脅威となっている事実が、正しかったことが立証されたことを第一に指摘している。

次に、この侵略と破壊がアメリカの最新鋭の爆撃機と軍事技術を駆使して行なわれたものであると同時に、それがイラクのみならずアラブ全体への攻撃であると述べ、アメリカ帝国主義の援助のもとに中東全域に覇権を確立しようとする野望のあらわれであるとしている。

今回の侵略と爆撃は、ベギンの最後の賭けという要因があったにしろ、イスラエルという人工国家のもつ侵略的な本質を全世界に暴露したものであり、国際法も国際世論も無視したベギンの暴挙は、イスラエルに対して同情的な態度をとってきた国々の世論にも大きな衝撃を与え、これによってイスラエルは多くのものを失うことになろうとの見方もなされている。

PLOの声明は、レバノン危機について引き起こされた重大な情勢は、アラブ全体への挑戦であり、これに対応するために、アラブの団結をよびかけるとともにイラク人民と一体となって、イスラエルの侵略に対決することを誓っている。

### アラブ首脳会議

#### アラファト議長が提唱

アラファト議長は、イスラエルがイラク原子力センターを爆撃したことによって生じた新たな事態に対応するために緊急のアラブ首脳会議の開催をよびかけてアラブ各国首脳と会談をつづけた。

六月十一日にトリポリに向かいリビアの革命指導者カダフィ大佐と会談したのを皮切りに、リビア、アルジェリア、モロッコなど北アフリカ（マグレブ）諸国を次々に訪問し、各国首脳と会談した。

十五日にダマスカスでシリアのアサド大統領と会いマグレブ諸国訪問の結果について報告し、さらに翌日にはバグダードに向かいサッダム・フセイン大統領と会談するなど、活発に働きかけを行なった。

一方、六月十一日にはバグダードで開かれた緊急アラブ外相会議でPLOのカドウミ政治局長（外相）が演説し、アメリカとその手先のイスラエルに対してアラブ諸国が統一をつよめ、断固たる対応をするよう呼びかけた。また、イスラエルとの対決をつよめ、東部戦線を再建しアラブ内部の対立や意見の相異をすみやかに解消するため、アラブ首脳会議の開催を提唱した。

### 暴挙は遺憾

#### 日本政府がイスラエル批判

日本政府は、園田外相の談話として、「イスラエルの行動は、正当化され得ない。極めて遺憾だ」とする立場を明らかにした。

談話は「日本政府は、イスラエルがかかる暴挙に出たことを、極めて遺憾とする。イラク領空に侵入し、その施設を破壊した今回のイスラエルの行動はいかなる理由があろうとも正当化され得ない」とのべている。

### 駐日アラブ外交団

#### 日本各界に要請

駐日アラブ外交団（団長はモロッコの

### 参院外務委員とアラブ外交団が懇談

駐日アラブ外交団は、去る六月二日に参議院の外務委員長はじめ外務委員有志と懇談した。

アラブ外交団の側からは、各大使がパレスチナ問題は中東に平和を樹立するうえで、きわめて重要であり、日本の議会が世論の形成と政府の正しい政策をうち出すため一層努力してほしいと要請した。

これに対して秦野章外務委員長はじめ各党の外務委員から、各政党の中東問題に対する見解が報告された。

とくに、パレスチナ問題の解決が中東問題の鍵であることをどの政党代表も強調した。また日本政府が一日も早くPLOをパレスチナ人民を代表する唯一正統な代表として承認すべきであるとの意見も多くの発言で出された。

アラブ外交団は、第一回の対話がきわめて有益であり、建設的な意見交換のために対話をつづけてゆきたいとしており、衆参両院の外務委員のみならず、より多くの議員の方々と交流をつづける予定。

なお当日は、次の外務委員が出席した（敬称略）。

秦野章（外務委員長・自民）





モカラブ大使）は、六月七日に声明を発表し、イスラエルがイラクを侵略し原子力科学研究施設を爆撃したことは「ナチの行状を思わせる」と非難すると共に、国際世論がイスラエルに対して、なんとなく寛大であろうとする傾向のあることに注意を喚起した。

こうした立場から同外交団は、六月十日に日本政府への要請を外務省を通じて行なうとともに、翌十一日には日本記者クラブで記者会見を行ない、別項の声明を「プレス・レリース」として、発表した。

さらに、日本の各界へ働きかけるために、政界と各政党の首脳、新聞など報道界をはじめ大衆団体や労働運動の指導者と次々に会見し、この問題で意見交換を行なうとともに、イスラエルに対して抗議し、何らかの制裁を行なうよう要求した。

六月十六日には、アラブ友好議員連盟の中曽根会長、更に同日、自由民主党の桜内幹事長と会談し、今回のイスラエルの侵略の問題を中心としながらもアラブと日本の友好の発展の方途や、アラファト議長の訪日について懇談した。

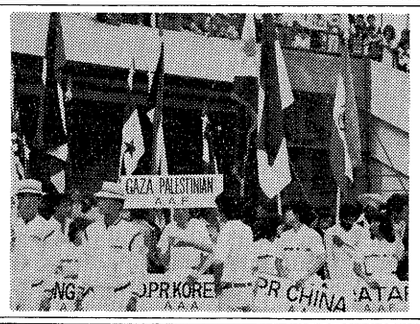
六月十七日には、日本社会党本部で飛鳥田委員長と会見し、アラブ側の立場を表明し、理解と協力を要請した。また、日本経済、朝日、サンケイ、読売など各紙の編集長と懇談し、世論の喚起に協力を求めた。さらに、六月二十日には、総評の槇枝委員長と、同二十二日には民社党の渡辺朗国際局長と、同二十三日には共産党の立木洋国際部長とも会談した。

### 緊急中東セミナー

パレスチナ連絡会議は六月二十七日に、アラブ連盟の共催を得て、イスラエルのイラク原子炉爆撃を中心とする緊急公開中東・パレスチナ・セミナー（テーマ「中東危機の構図とアラブの対応」）を行ない、アラブ側の受けとめ方を聞いたあとで、日本人としてどのように考えるべきかをめぐって討論した。

緊急セミナーでは、アラブ側の考え方について、アザーリ・アラブ連盟駐日代表、アブドルハミードPLO駐日代表、モハメド・イラク報道官らが発言した。これらの発言に対して、小林慶二（朝日新聞）、岡倉徹志（毎日新聞）、北村文夫（読売新聞）各氏によるコメントがなされた。出席者は約百名。

稲嶺一郎（理事・自民）、鳩山威一郎（同・自民）、松前達郎（同・自民）、木島則夫（委員・民社）、中村啓一（同・自民）、渋谷邦彦（同・公明）、戸叶武（同・社会）、田中寿美子（同・社会）、立木洋（同・共産）。




### パレスチナ選手団

六月上旬に東京で開かれた第四回アラブ陸上競技大会には、パレスチナの選手団が参加した。もちろん、アラブ陸連の決定で「パレスチナ」の完全な名称が使用されるのは今年十月の大会からで、今回も「ガザ（パレスチナ）」の形で参加した。選手団はパレスチナの旗を先頭に入場行進し競技に参加した。（写真）

イスラエルは様々な言い訳を使って世界の世論にこの攻撃の正当性を訴えているがこの無法な行為は、イスラエルがその建国以来追求してきた、かれらの政策と戦略の本質、つまり侵略、テロ、拡張主義を露にするものである。

かれらの戦略の目的が、いわゆるイスラエル国家の安全という、似非の口実のもとにパレスチナ全土にしがみつき、さらに多くのアラブの領土を占領しようとするものに他ならないことは明瞭である。

しかしながら、アラブの主権国家に対する今回の新たな侵略行為は、国家暴力というイスラエルの政策の新たな展開を示すものである。換言するならば、イスラエルは、世界の中でもとくに戦略的に微妙なこの地域において、暴力と戦争をさらにエスカレートさせる一歩を踏み出した、ということである。このことは、イスラエルの真の目的が、キャンプ・デービッド和平体制にさえ従わないものであることを証明するものである。

平和目的で建設された原子力科学研究施設に対するこのような攻撃は、いかなる理由でもってしても正当化されうるものではない。同じような施設は、日本を含め世界の数多くの地域に存在している。イラクは日本と同じく、核不拡散条約の調印国である（イスラエルと南アフリカ共和国は調印していない）。

こういうやり方は、理由にならない理由で侵略を正当化していたナチの行状を彷彿とさせる。

イスラエルの侵略の大きな目的の一つは、アラブの新しい世代が、アラブ人民の向上と国の進歩のために、科学技術を獲得し開発しようとする努力を妨げようとすることである。

さらに、この侵略行為が全世界に証明したことは、この地域に暴力と戦争をもたらし、世界平和の脅威を与えている元凶、不安定と紛争をもたらしている元凶がイスラエルだということである。

つけ加えるまでもなく、正真正銘のテロリスト、つまり、ベギンが無法にもこの侵略行為を認めたわけだが、これは、国際法上にも、前例がない。しかも国連憲章の原則と国連の関連決議にも違反している。

アラブ外交団は、国際舞台におけるイスラエルの行為に対して、国際社会がなんとなく寛大寛容なのではないかということに注意を喚起したい。そして安全保障理事会の一員である日本にはとくに、平和を愛する国として、全幅の責任を果していただきたいと思う。さらに、この侵略行為に対して明確な言辞での非難がなされ、国連憲章に規定されている制裁も含めてすべての必要な手段を通じて、この侵略をはっきりと止めさせるべく意を用いてほしいと思う。

アラブ世界は、世界経済を発展安定させ、世界平和を促進するために、自らの責任を果たしてきたし、現在そうする用意もある。しかしこれは、主権・安全・領土保全に対する民族的権利が完全に尊重され認められたときに言えることである。しかし民族的権利は、パレスチナ人民の人権・民族的権利の回復なくしては実現できないことを、ここで改めて強調したい。

### 駐日アラブ外交団の声明

# PLO＝ルーマニア共同声明

### チャウシェスク大統領の招待

ルーマニアのチャウシェスク大統領の招きでアラファト議長はルーマニアを訪問した。さる五月二十五日には、アラファト議長とルーマニアのチャウシェスク大統領とが会談し、PLO・ルーマニア共同声明が発表された（写真）。声明は要旨次のようにのべている。

①共通の関心である国際問題をめぐる対話の継続として新たに会談がもたれたことに双方が満足の意を表明した。

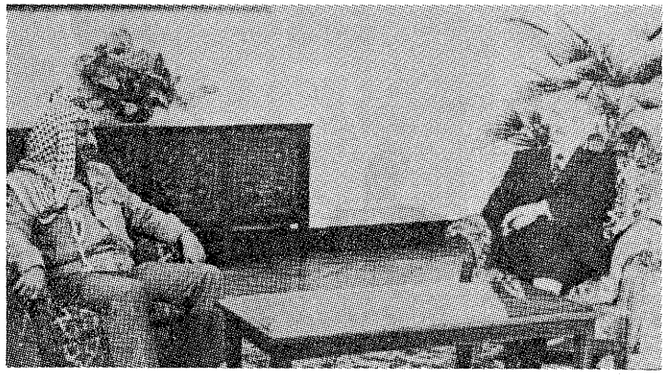
② 双方は会談を通じてPLOとルーマニア共産党、パレスチナ人民とルーマニア人民との友好関係と相互の連帯の強い絆を確認し、これらの関係を今後とも発展させて、世界平和、協力と発展に寄与して行きたいとの希望を表明した。

③ 双方の首脳は国際情勢とくに最近の中東情勢を討議し、中東平和の実現の方途について意見を交換した。チャウシェスク大統領は、PLOをふくむ全ての当事者が対等の立場で参加する方式で真の解決をはかるべきこと、そのためにはイスラエルの全占領地からの完全・無条件撤退を実現し、パレスチナ独立国家建設をふくむ一切の民族的諸権利を回復することが必要であることを強調した。

④ 双方は、レバノンの主権と独立を守るためにレバノン内部での戦闘を中止させるよう努力することが必要であることを強調した。

⑤ アラファト議長はパレスチナ人民の大義のために支援をよせてきたルーマニア政府と党と人民に感謝し、チャウシェスク大統領は、パレスチナ人民の大義の実現のために政治・外交・経済の諸分野をはじめ物心両面のあらゆる援助をつづけてゆく決意を表明した。

なお、この会談にPLO側からは公式スポークスマンのアブデル・ムフシン・アブ・メイザー氏とアハマド・アブデル・ラハマン氏（ファタハ革命評議会）と、ルーマニア駐在のPLO代表が、ルーマニア側からは、ステファン・アンドレイ氏（ルーマニア共産党中央委員）とルーマニア外相が同席した。



### 米国の情報操作を非難
#### ロンドンの通信社会議でWAFA代表

アラブ・ヨーロッパ通信社会議が、さる五月二九日にロンドンで開かれたが、この会議にはPLO側からパレスチナ通信（WAFA）のジアド・アブデル・ファター理事長が参加し、発言を行なった。

この会議はアラブとヨーロッパ諸国の間で情報提供などの面で協力を強めてゆくための対話としてもたれた。ファター理事長は、パレスチナ解放の大義をゆがめている国際報道の現状を指摘し、アメリカのレーガン政権が国際的に報道操作を行ない、PLOに〝国際テロリスト集団〟のレッテルをはっている実態を告発した。

その具体例の一つとして、ファター理事長が指摘したのは、ローマ教皇の狙撃事件があった時に、犯人がPLOと結びつきがあるかのような情報を国際的に流した事実をあげた。

### 赤十字代表の死

一九四八年のパレスチナ戦争にいたる期間と、この戦争中に国際赤十字社のパレスチナ派遣団団長として活躍し、あのディル・ヤシーン村の大虐殺を目撃したジャック・ドレニエ氏は、去る五月三日、パリで他界した。

パレスチナ月赤十字社のファトヒ・アラファト会長は、国際保健機構（WHO）参加のPLO代表団団長としてジュネーブを訪問中であったが、レニエ夫人に弔電を送り、PLOを代表して弔意を表わした。

レニエ氏は、自らの体験をもとに、証言集を著したが、とくにディル・ヤシーンの大虐殺の部分は、貴重な証言となった。

### PLOラジオ

PLOのラジオ放送機関の「パレスチナの声」は、五月十五日のパレスチナ・デーを期して従来のアラビア語・ヘブライ語放送に加えて英語放送を開始した。

現在のところは、現地時間で午後の四時四十五分から五時までの十五分に限られているが、周波数は中波の一、二七〇KHZ、一、一六〇KH





## カナダで世論の波

昨年五月三日にイスラエル当局によって追放された二人のパレスチナ人市長は、五月中旬に北米のアピール旅行を行ない、二週間にわたるカナダでの活動は、カナダの世論にも大きな影響を与えた。

オタワからの報道によると、ヘブロンのカワスメ市長とハルフールのミルヘム市長は五月二十八日にカナダの外務省関係者と一時間にわたって会談し、追放事件の経過と現情を報告した。

これに対してカナダ外務省の首脳は、最近のレバノン情勢、中東問題解決をめざすパレスチナ側の構想と展望などについて質問し、意見を交換した。

（ミルヘム市長）

（カワスメ市長）

また席上、外務省首脳は、イスラエル政府当局者が両市長を追放したことは、いかなる意味でも正当化できないものであり、この立場を再度イスラエル政府に伝え、両市長の復帰を働きかけたいとの意向を明らかにした。

また同日にはマリオン・デワール・オタワ市長とも会見し、九人の国会議員とも会談するなど精力的なアピール活動を展開。

なお五月二十七日には特別記者会見が行なわれ、この問題について各新聞でも大きく扱った。「シチズン」紙は、特別インタビューを掲載した。

両市長はこのあとケベックに向かい、更に広範な世論に訴える活動をつづけた。追放一年めを迎えてアメリカ、カナダと国連へのアピールの旅は、最後にカナダ国内の多彩なプログラムによって大きな成果を残した。最初にニューヨークを訪問した両市長は、五月十四日にワルトハイム事務総長とも会見し、国連を通じての支援を要請していた。

## 追放された市長ら再び北米の旅へ

### ロンドンのPLO代表
### アラブ外交団長に

ロンドン駐在のナビル・ラムラウイ代表が駐英アラブ外交団の団長に選出された。

ちなみに、駐日アラブ大使協議会（外交団）はエジプトを除く十六カ国（PLO含む）により構成され、外交団長は、年功でカタールのアル＝ハジリ大使がつとめていたが、このほど本国に帰られるためモロッコのモカラブ大使が団長に就任した。

ついで、マルタ駐在のアブ・イッサPLO代表も同国駐在のアラブ外交団団長に選出された。

ナビル・ラムラウイ氏は、国際政治学を専攻する学者（博士号をもつ）としてPLOの研究センターで活躍していたが一九七八年一月にサイド・ハマーミ代表が暗殺されたため駐英代表となり今日に至っている。

てヨーロッパ諸国の外交関係省の間で話題となっている。

各国に駐在するアラブ外交団の団長は、慣例によって、その国に赴任した年月の長い順に委嘱されてきたが、駐英アラブ外交団は、今年から年功にとらわれず人物本位で選挙によって選ぶ方式がとられた。

これによってイギリスでは、外交特権が未だ認められていないPLO代表がアラブ外交団団長としてイギリス政府との間の重要な地位を占めたことになり、外交史上にも新しい前例をつくり出したとも言える。



Z、または一、一三八KHZ。近く時間も30分に延長。

### モンゴル共産党大会に

モンゴル共産党の招待を受け、同党の第十八回大会にPLOは代表としてモスクワ駐在のムハマド・アル・シャエル氏を派遣した。

モンゴル共産党の第十八回大会は五月下旬にウランバートルで開かれ各国からもゲストとして代表が招待された。

### 運河計画に反対

イスラエル当局は、死海から西岸とガザ地区を通過して地中海を結ぶ運河の建設計画をすすめている。これに対してPLOは、このほど非同盟諸国、イスラム会議、アラブ外相会議をはじめ国連のワルトハイム事務総長にも訴えて、イスラエル当局の計画を中止させるために国際世論が行動を起こすよう呼びかけた。

### 家屋の破壊が

一九六七年の第三次中東戦争いらい今日まで、イスラエルが占領下のパレスチナで破壊したパレスチナ人の家屋は、一、二五九軒にのぼることが最近イスラエルの新聞（ハアレツ）によって明らかにされた。

# ブリュッセル駐在PLO代表の暗殺

ブリュッセル駐在のPLO代表、ナイーム・ハーダル氏は、6月1日、ベルギーのブリュッセル市内の通りで、同代表部に向かう途中、疾走する車に乗った暗殺者（複数）によって狙撃され、即死した。五発の銃弾が暗殺者によって撃ち込まれた。ブリュッセルのPLOスポークスマンは、ピストルをもった暴漢たちが、イスラエルの諜報員であることを、後に断言している。

ナイーム・ハーダル氏は、一九三九年生まれで、ルーベン大学から法学博士号を授与されている。一九七五年いらい、PLOのブリュッセル代表を務めてきており、パレスチナの大義への支持と理解を、ねばり強く、活発に、しかも大胆に訴えてきた。その外交活動によって、EC本部はもとより、ベネルックス三国の外交官や学者の間では広く知られていた。

## 欧ア対話の要として

ハーダル氏は、一九六七年にファタハ（パレスチナ民族解放運動）に参加。在ブリュッセルのパレスチナ人留学生組織の議長に選ばれたこともあった。一九六九年には、ファタハのベルギー支部の代表となり、一九七五年には、ベルギー駐在のPLO代表に任命され、同時に、EC欧州議会同盟、欧州・アラブ対話評議会などに対して、PLOを代表して、その交流促進のための重責を担っていた。

イスラエルの諜報機関（モサド）は、これまでヨーロッパ諸国駐在のPLO代表を何人も暗殺してきた。その中には、パリ駐在代表のマフムード・アル＝ハムシャリ、同エゼディン・カラク、同じくマフムード・サーレ、ローマ駐在代表のワエル・ザエータル、ロンドン駐在代表のサイード・ハマーミ、キプロス駐在代表ら各氏の名前があげられるが、ハーダル氏はこの名簿の中では、最も新しい犠牲者となった。

フランスのクロード・シェイソン外相

## 学者・外交官として

ハーダル氏は学者であり、外交官であった。祖国パレスチナの解放のために献身することが、ブリュッセルで法律家として仕事をしたり、あるいは安易な生活を営むことよりも、大切だと信じて疑わない愛国者であった。ハーダル氏は、一度だって銃をもち歩いたことはなかったし、生きものを殺したこともなかった。彼の暗殺は、エルサルバドルであれ、パはいち早く、ハーダル氏の暗殺を強く非難した。というのも、同外相は、ブリュッセル時代に、ハーダル氏と何年もいっしょに仕事をしてきた経緯があり、ハーダル氏をよく知っていたからである。同外相が、いち早く非難の立場をとったのも、同じ外交官である友人が、無惨に殺害されたことに一人の政治家として戦慄を感じられたためである。ヨーロッパのいずれの国であれ、外相と親しい関係をもつものが、イスラエルの残虐行為の犠牲に供されることを覚悟しなければならないとは、余りにもひどいことである。時代の変化の前兆は小さくとも、それは、テルアビブとワシントンのテロリストの首領たちに対して、その残虐な活動を思いとどまらせるものとなるべきである。

## 政治囚は語る

イスラエル当局によって六十年の刑を言い渡されていた一人のパレスチナ人が、十三年間も投獄されていたが、病身を理由にこのほど釈放されたことをパレスチナ政治囚擁護委員会が、記者会見で明らかにした。

釈放されたのはアル＝アジラミ氏で、一九六七年十二月十五日にパレスチナ解放運動に関係している、という嫌疑がかけられ、逮捕され、六十年の刑が言い渡された。あちこちの刑務所をまわされ、十三年間も投獄されてきたが、病身のため獄死するのをおそれたイスラエル当局は、彼を釈放した。

やつれ果てたアジラミ氏は、かすかな声で、逮捕・拷問の様子を語った。それによると、まず早朝、家が奇襲され、中にあるものは何でも破壊されたという。家もこわされてしまった。

拷問のやり方は、人間とは思えぬものだった。獄舎は狭く、与えられる食べ物は、くさったものが多く、そのために病気にかかるものも多かった。にもかかわらず、パレスチナ人の政治囚たちは、獄中でたたかいをつづけているこ





レスチナであれ、いま行なわれている、冷血なテロ行為の完全な典型であり、国際テロを非難しているアメリカ政府の言明とは相入れないものである。

ナイーム・ハーダル氏のみならず、ヨーロッパ駐在の、PLO代表たちの暗殺は、あきらかなテロ活動である。ハーダル氏を殺害するために動いた機関が、あれこれの言い方を選ぼうとも、その行為はテロ以外のいかなる呼び方もできない。

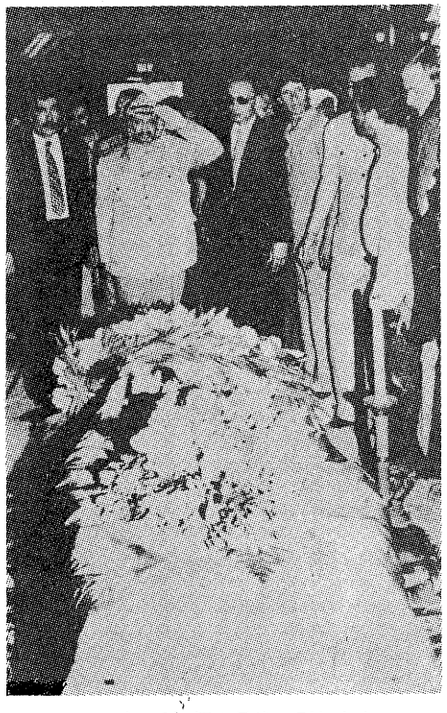
PLO執行委員会は、ファタハ中央委員会と共同で、6月1日に行なった声明（新聞発表）の中で、ハーダル代表を殺した殺し屋たちが、無傷で逃げおおせるものではなく、当然の制裁を受けるであろう、と宣言した。

この声明はまた、ハーダル代表を暗殺した者が「シオニストと帝国主義者の諜報機関の手先である」とのべている。

## イスラエルの国際テロ

声明は、さらに、「ハーダル代表は、ヨーロッパで活動しているPLO幹部のなかでも最もすぐれたもののひとりであり、彼の長期にわたる輝かしいたたかいは、わが人民と彼の同志たちにとって、たえず誇りの源泉となるであろう」ともべている。テロ行為がいかなる時に、テロ行為でなくなるというのか。ブリュッセルの通りを職場に向かっていた、丸腰の外交官を殺害することが、国際テロ活動ではないというのか。アメリカの公的な機関が最近とくに声を大にして非難していた国際テロ活動とは、このような行為をさすのではないというのか。

答えは、きわめて簡単である。男女であれ、大人であれ、子供であれ、殺される者がパレスチナ人であり、殺し屋、空軍機のパイロット、砲兵隊がイスラエル人であれば、テロはテロでなくなるということである。〝正当な自衛〟とか、欺まん的なこじつけをいかに用いようとも、それは、彼ら以外の言葉では、単純に「殺戮」と言われるテロ行為である。



ハーダル氏の柩と最後の別れをするアラファト議長とPLOの首脳

## ベイルートで告別式

暗殺されたナイーム・ハーダル氏の告別式は六月五日にベイルートの西にあるフランソワ・カプッチー教会で厳かにとり行なわれた。ハーダル氏の柩は、ベイルート空港で栄誉礼とともにアラファト議長、アブ・ジハドらによって迎えられ、アラファト議長を先頭に空港から教会まで葬送行進がおこなわれた。

告別式にはベルギー外務省高官、ヨーロッパの議会代表者ら約二十名も参列した。遺体はアンマンに埋葬された。

## 外交官を狙うモサド

（イスラエルの諜報機関）

## ジュネーブで集会

スイス・パレスチナ友好協会の主催するパレスチナ問題特別集会が五月二十四日から三日間にわたってジュネーブで開かれた。

この集会にイスラエル占領下のパレスチナから西岸地区専門技術者総同盟の書記長が招かれ、特別報告をおこなった。またジュネーブ駐在のダウド・バラカートPLO代表がレバノン情勢について報告した。

議題は主にパレスチナ人民の大義とたたかい、さらにイスラエルの占領支配と抑圧などの二つで、集会ではパレスチナの映画も上映された。

## ギリシアの代表団

ギリシア教師連合会代表団が、このほどパレスチナ教師総同盟の招きでベイルートのPLO本部を訪問し、あわせてレバノン南部に対するイスラエルの侵略と爆撃による破壊状況を調査した。

五月末日にベイルート入りした同代表団は、約一週間にわたり交流と調査を行ない、PLOの首脳とも会談した。

**「貧乏人のおやじ」**

――そういう意味で、基本的に日本に対して親近感があるということですか。

小高氏　そうですね。そのあとアラブが日本について知ったのは、第二次大戦前の日本の綿布、雑貨の水のような流入ですね。これは英国のランカシア綿が高くて手に入れられなかった大衆に、非常に、歓迎されたわけです。それまではお祭りになっても、こどもに晴れ着一枚つくってやれなかったのに、日本の安い綿布が入って晴れ着をつくってやることができるようになったわけです。アラブ首長国連邦のある商工会議所の事務局長が「オレの小さいとき、オヤジは、日本は貧乏人の〝オヤジ〟だと教えた」というんです。これは日本の綿製品輸出と関係がある。貧乏人が買えなかったものを、日本が与えてれくたということでしょう。

――それから第二次世界大戦というわけですか。

小高氏　そうです。日本が米英に負けたと思っていない連中も、けっこういるのですよ。原爆がなかったら日本はもっと戦ったろう、なんて考えている人たちもいるんで、それも立派な参謀将校クラスでね。それから戦後の急速な経済発展です。アラブが具体的に日本を知ったのはそのときからで、それ以前は彼らにとって日本は〝幻の民族〟だったと思うんです。

――オイル・ショック前のアラブが日本人にとってそうであったようにですね。

小高氏　そうです。アラブはそのとき日本人を初めて知ったわけです。ところで、アラブというのは修辞的表現が上手なんです。美辞麗句を並べるのがね。彼らは「日本人は、〝白い手〟ですからね」といいます。中東で手がよごれていないということです。だから日本との関係をよくしようという。すると日本人はその修辞的表現に酔っちゃうんです。「いやあ〝白い手〟といわれたよ」って。たしかに日本はアラブの血を流さなかった。だが〝白い手〟というのはお世辞の言葉だと思えばいい。逆にいうと〝白い手〟というのは、日本はアラブを知ってないじゃないか、という別の意味もあると思うんです。

**偏見持たぬ良い面も**

――たしかに、その通りだと思いますね。

小高氏　だが、何も知らんという方が強いとも思うんです。面と向かって相手の悪口はまず言わないし、相手の宗教をどう思っていようが、悪くはいわない。ところが、ヨーロッパの連中は中東に日本人よりもはるかに大きく進出しているが、イスラムに対してうんです。

――で、今後の具体的な付き合い方は…。

小高氏　さっきいいましたように、ヨーロッパ人の先見性がアラブを尊敬させた一つの要素でした。では日本は、どういう形で先見性を示し、尊敬をかちとることができるか。結論からいって、日本は経済成長や技術進歩ということでは大変な国になったわけですが、たとえば経済成長のメカニズムを理論化して、アラブに友好のしるしとして紹介するということも大きな意義があることでしょうね。

――日本の経済発展を一般化して、理論的に説明できるものを日本人がつくらなければいかんのではないかということですね。

小高氏　そうです。日本の経済発展は、基本的に日本文化の上に築かれているものです。従って、もしできれば、さらにイスラムあるいはアラブの文化の基礎の上にどうしたらよいかを予告してやることですね。そういうことをすれば、彼らは欧米以上に日本を評価し、尊敬するんじゃないですか。

――「サンケイ新聞」5月29日「進路をきく、前駐シリア大使　小高正直氏」より

## 超大国と日本の中東政策

**前駐シリア大使　小高正直氏**

## スズキの広告にサウジが怒る

最近西独の週刊紙「シュテルン」が掲載した鈴木自動車工業の広告がサウジアラビアを中傷したものだと同国の怒りを買っており、サウジアラビアが鈴木自動車をボイコットする恐れも出てきた。問題の広告は、アラブ人が鈴木の自動車のそばに立っていて、それに「アラブ人は燃費のいい小型車を好まない」とのキャプションが付いている。

サウジアラビア政府当局者らは「この広告は、アラブ人を欲張りで無神経で、しかもだらしなく石油消費型経済を気にしない軽べつすべき民族として描いている」と批判している。

二十六日付のサウジアラビアの英字紙「アラブ・ニューズ」によれば、アブドル・ラーマン・アル・ザメル同国商業省次官は同紙に対し「西独の自動車代理店が広告を出したものであったとしても、商業省としては、かつて同様のケースに公式の謝罪に加え数百万の罰金を科したのと同じ措置を講じるつもりだ」と述べた。

――「朝日新聞」5月27日より



# 拝啓 関係各位殿

**PLOから敬意をこめて**

**パレスチナと日本 ⑥**

## ヒロシマの影

ベギンがイラクの原子炉爆撃を命じた日の前後に、衝撃的なニュースが日本社会を襲った。いわゆる〝通り魔〟と言われる者による、おそるべき連続殺人である。凶悪な犯罪が相次ぐほど社会が痛んでいると評しても、再発を防止するための何らかの保証がなければ、人々の不安は解消されないであろう。

イスラエルがイラクを侵略し原子炉を爆撃した行為を、精神異常者の通り魔的殺人行為と同じ次元で論じることには問題がある。が、激しい怒りを表明するために、そのような比喩が日本の政治評論家の率直なコメントとして出されたことを友人から聞いた。国連のメンバーでありながら決議はもとより憲章にも一切従わない方針をとりつづけてきたイスラエルは、国際社会の孤児になってきている。このイスラエルを評して、アラファト議長は、「アメリカという母親に甘やかされて育った手のつけようのない乱暴息子だ」という比喩を用いることがあるが、今回の出来事によって、この比喩は、いっそう真実味を帯びてきた。

一個の人間の行為ならば、たとえ精神異常者と言われる人であれ、その凶悪な犯罪を正当化できる理由づけよりも、厳しい非難が先に集中するのに、一つの国家の行なった不法行為という罪には何らの懲罰も科せられないことを知っているから、国際社会の無法者は、やりたい放題のことを堂々とやってのけてしまうのだろう。三十三年間も、彼らがパレスチナ人民に加えてきた犯罪は罰せられなかったという〝自信〟が、次から次へと無法行為にかりたてるのであろうか。

たしかに、三十三年前にベギンが先頭になって行なったディル・ヤシーン村の大虐殺は、まだ罰せられてはいない。レバノンで何千人ものパレスチナ人とレバノン人たちを殺りくした罪も、罰せられていない。むしろ、国家テロの首領としてのベギンは、その〝高貴なる行為〟によって〝高貴なる賞〟（ノーベル賞）を授与されたのであった。ベギンは、この授賞を弱肉強食のジャングルの掟をふりかざして、国際法も人類社会の原則をも無視する道をつきすすむ激励として受けとめた。イスラエルへの非難が国際社会において高まっても、ベギンはじめ政権担当者たちが耳を傾けたためしはない。三十三才となった〝放蕩息子〟には、口頭での非難や諫めを聴き入れるほどのナイーブさを失っているのであろう。

しかし、彼らの理性を回復する方法が全くなくなったと考えるならば、今回の事件から、国際社会が教訓をひき出すことが不可能となる。しかも、イスラエルは、すでに数年前から原爆を保有していることが明らかとなっていると言われているのである。

二年前に広島を訪れた一人のパレスチナ人画家がいる。ジュマーナ・フセイニ女史である。イスラエルの原爆が落ちてこない保証のない連日の生活の体験からジュマーナは、広島でこう語った。「私たちパレスチナ人たちは、毎日イスラエルの爆撃にさらされながら、ヒロシマの影を見ているのです。」

影がいつ現実となるか予測できない不安は、今回のイスラエルの奇襲攻撃によっていっそう無気味な原子雲のように、パレスチナ人たちの頭上にひろがってきている。

緊急特集＝イスラエルの「核戦争」

# イラク原子炉爆撃をこう見る

〈対談〉 板垣雄三・佐藤栄一

**佐藤**　今回のイスラエルによるイラクの原子炉爆撃は、選挙を前にしたベギン政権へのテコ入れを促すという意図が一つあったと思います。それがもちろん、全部ではありませんが。イスラエルの各紙は、全部、もろ手を上げて「良かった」と原子炉爆撃をほめたたえて、喜んでいるのですから、勝負ありというところでしょう。

ただ今度の爆撃というのは、サウジアラビア上空を通過して実行されたといわれているわけで、サウジに対するデモンストレーションにも、なったといえるのではないでしょうか。

**板垣**　その場合、AWACS配備に対して投げかける意味は大きいですね。

**佐藤**　AWACSというのは、まだアメリカが所有しており、当日は別の地域を飛行していたというのが、アメリカ及びイスラエルの言い方です。AWACSをサウジが独自で運用するようになれば、奇襲攻撃はきわめて困難になるというのが、イスラエルの主張だというわけです。

**板垣**　現実には、湾岸の安全保障などと言っても、非常に局部的なカバーしかできていないではないかということになってしまうわけですね。

**佐藤**　そのへんが、いろいろな憶測を呼んでいるところですね。

**板垣**　イラクの原子力センターの爆撃については、核の問題にだけ集中して考えるべきではなく、全般的な武器援助の問題の中で眺める必要がありますね。

**佐藤**　核兵器という場合、いわゆる核爆弾の問題と、運搬手段の問題とがあります。今や、原爆製造そのものは、それほど大変なことではありません。問題は、原爆の材料の入手をいかにするかということと、運搬手段の確保なんです。アメリカは、核の運搬に転用できる運搬手段を、武器援助でたれ流しをやっているわけです。

**板垣雄三氏**　東京大学教授。専門はアラブ現代史。中東問題の日本における第一人者として衆目の評価は高い。パレスチナ問題についても早くから鋭い視点で提起し注目された。特にシオニズムとナチズムの癒着を指摘した論文は波紋をなげかけた。主な編著に「アラブの現代史」（共著）「アラブの解放」「中東ハンドブック」など多数。

**板垣**　イスラエルのがわで言っている、中東を非核地域にするという提案をどう見るべきでしょうか。

**佐藤**　私は、それがかりにできるならば非常に良いことだと思いますが……。イスラエルの核武装が確実視されている以上、本気で唱えているとは思われませんね。

**板垣**　イスラエルがすでに核武装しているのか、していないのか、ということ自体が明らかにされないところでは、中東非核地帯案に関する議論がそもそもどれだけできるか分かりません。

**佐藤**　イスラエルは核武装の事実について言明をさけているわけですからね。しかし、ディモナの上を飛んだ自国の飛行機でさえ撃ち落とすのですから……、間違いないでしょうね。ただ核の問題から言いますと、持っているかもしれないし、持っていないかもしれない、と思わせるのが一番いいわけですね。

**板垣**　国民にも持っていると思わせるのは、国内的・国際的に効果的でしょう。

**佐藤**　現実に持ったという事実を明らかにするよりは、はるかに効果的ですね。

つまり、イスラエルは自分が持っているかどうかははっきりさせず、敵性国が所有するようになったら自国の存立が危いから予防攻撃を行ったのだと、こういうことなんですね。

**板垣**　しかしこの作戦は長期的視点に立てば問題だらけでしょうね。短期的には、ものすごく精密に計算したと思います。それだけの仕かけとしては成功したと思います。しかし時間の幅を少しでもひろげて見たら、だれにも分かるはずの理屈が分からないで突っ走ってしまった、という面がはっきり現れてくると思います。

**佐藤**　長期的に露呈してゆく失敗として、たとえば、イスラエルのイラク原子力施設攻撃に直面して、中東地域には「イスラエルがやったから、われわれもやろう」という声がすぐに出ました。

**板垣**　核の問題ばかりでなく、イスラエル国家に対して攻撃を加える可能性があったり、またそうした準備が行なわれている場合には、世界のいかなる場所であれ、そこを攻撃する権利を持つというのは、イスラエルのかねてからの議論です。

**佐藤**　パキスタンが、イスラエルの攻撃を警戒しなければならないとの反響も呼びましたね。そうすると、中東だけにとどまらず他の地域をも巻き込むことになるわけですね。

**板垣**　核拡散とそれをめぐる武力紛争、さらには他のもろもろの形態の紛争を世界中に拡散し激化させることになります。そういう導火線にイスラエルが火をつけてしまったということのツケは、やがてイスラエル自身のがわにも回っていくことにならざるを得ないのです。

## NPT体制の破局

**佐藤**　現在、NPT（核拡散防止条約）体制というものが存在しています。その体制の前提には、核拡散はまず先進工業諸国家が核保有に接近するだろうという考え方に依拠していました。それに合わせて、現在のNPT体制、これ以上核兵器保有国をふやさないという条約ができたのです。ところが、一九七三年に第四次中東戦争が起こり、石油戦略が発動され、石油が入手できないなら原子力発電があるということで、原子力発電の導入に先進工業国だけでなく、開発途上国もこぞって踏み切ったわけです。

なおかつ開発途上国、特に中東について言いますと、ヨーロッパやアメリカは、そこから石油を輸入するということもありまして、中東各国に原子力発電所の輸出契約を取り付けることになりました。それで、全体として、グローバルな原子力発電の普及への志向という情況が起きてきました。

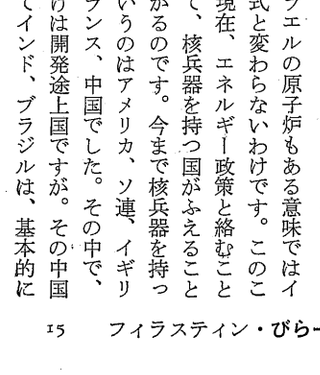
そこまではまだ良かったのです。原子力の平和利用はまったく阻害されないというのがNPTのもう一つの側面であったのですから。ところが、七十年代半ばになりますと、周辺地域で紛争を常に体験している国々が、原子力発電をやるということで修得したノウ・ハウや知識あるいは養成された人材を利用して各地域で、平和目的の原子力の軍事利用への転用を図る動きが出きてきたのです。つまり、先進工業国から核兵器の拡散が始まるだろうと言われていたNPT体制の当初の前提がゆらぐことになってきたわけです。そして、開発途上国の財政、人的資源、技術水準などの制約のなかで、結果として原爆をできるだけ安く作ろうという方向を、開発途上国の中でも、とりわけ紛争地域にある国々が持ち始めたのです。この危険は、一九八〇年九月のワルトハイム国連事務総長報告がきびしく指摘しているのは周知のところです。

それを端的に表しているのが、パキスタンの核開発ですね。それは、原子力発電で出てきた、原子炉の中の燃え滓を使って、原爆を作ろうという従来のパターンと違い、原子力発電の実現はともかく、まず原爆の燃料を獲得し、プリミティブな原爆をとにかく製造しようというやり方を採用しているというわけです。

それと同じ道、あるいはさらに困った問題を提起することになると思われるのがイラク型の原子力開発です。すなわち、イスラエルの攻撃をうけたイラクの原子炉は、九十三パーセントという高濃縮のウラン235を燃料にしています。これは原爆の材料そのものです。とすると原子力発電をやって、その燃えがらからプルトニウムを取り出すというのではなく、ウラン235という、そのまま原爆の材料になる九十三パーセントの核燃料を、軍事目的にミスユースしうる可能性を、もっているわけです。イスラエルが危機感を持ったのは、この点にあるのです。

ただし、原子力の平和利用であれば、イラクがいかなる炉型を採用してもそれを阻止される理由はないのです。平和目的であれば、積極的に援助するというのが、現在のNPT体制の趣旨ですから。しかも、イラクはNPTの加盟国でありますし、批准もしているのです。ですから、そういう国に対して、原爆を作るのではないかということで、ある日突然に闇討をくらわせるというのは、国際法の面から決して許されない行為だと思います。

イスラエルの原子炉もある意味ではイラク方式と変わらないわけです。このことが、現在、エネルギー政策と絡むことになって、核兵器を持つ国がふえることにつながるのです。今まで核兵器を持った国というのはアメリカ、ソ連、イギリス、フランス、中国でした。その中で、中国だけは開発途上国ですが。その中国に加えてインド、ブラジルは、基本的に

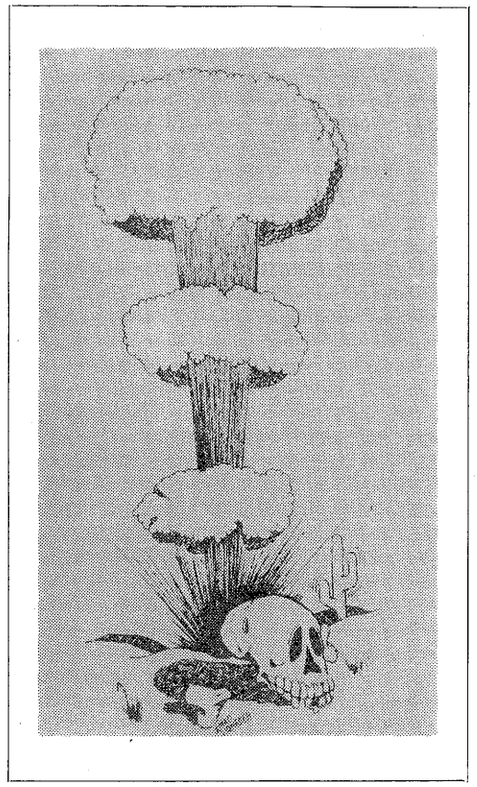


**佐藤栄一氏**　日本国際問題研究所主任研究員、神奈川大学・創価大学講師。核拡散防止問題や兵器輸出の分析をすすめながら、第三世界における核拡散の危険を警告。主な著書に「核拡散防止条約の現状と問題点」など。最近の論文に「米ソ軍縮協定にひそむ虚構性――ヘゲモニーをねらうアメリカの冒険」がある。

は先進工業国と同じスタイルでの核開発をやろうとしました。濃縮ウランを作り、原子力発電をやって、出てきた燃えがらの中から、プルトニウムを取り出す再処理工場を作るという方向で動いたのです。ところが、パキスタンの場合はそうではなかったのです。あちこちからダミーを使って、ウラン濃縮プラントのための部品を買い集めて、最小のコストでもっともプリミティヴな核を作るという、一番安上がりの方法を考えたわけです。

**板垣**　南アフリカの場合はどうですか。

**佐藤**　南アの場合は、自国に濃縮工場を持っているのです。ところが、パキスタンの場合は、持っているかどうかわかりませんが、巷間伝えられる報道では、いま私が申し上げたとおりです。イスラエルの場合はプルトニウムを材料とした



か、最小限の濃縮施設によりウラン235を材料としたか、とにかくすでに原爆を保有しているということになっています。パキスタンの場合は、プルトニウムではないようです。イラクの場合は、輸入した濃縮ウランをミスユースするのではないかと、イスラエルが疑心暗鬼になっていたわけです。

八十年代は核拡散の時代に入ると言われており、安直に、安く、とにかく、原爆を作れるということになってきています。しかも原爆を作るというのは、たとえばMIT（マサチューセッツ工科大学）の学生が図面を引けば、大体広島型の原爆ができる、ということになっており、問題はいかにして核分裂性物質を仕入れるかということだけになってます。それを、パキスタンなどが他に先がけてやっているわけです。

**板垣**　イラクの原子炉建設に対するソ連の協力は、フランスの協力の仕方と、どういうような関わりを持っていたのでしょう。

**佐藤**　ソ連の場合、原爆保有につながるような形の協力はないと思います。なぜかと言いますと、中ソ対立の一大原因のひとつとなったのが、中国の核開発に対するソ連のサボタージュだったからです。ですからソ連としても原爆を作るという形での協力はないと私は思います。

中国は、世界の国々が核兵器を持てばいいと言っていましたが、それは自力で持てということであって、中国が援助するというようなことを言ったことはありません。中国自身が自力更生で持ったのですから……。

## 国際法違反の中味

**板垣**　仮に、イラクが研究炉と称して核物質を手に入れて、それを原爆生産に転用し、原爆が生産できたとしても、それだけでただちにイスラエルに対する脅威になるとはいえないでしょう。

**佐藤**　なりません。その後が問題となります。しかし現在の状況から見て、フランスがイラクに提供した原子炉に装荷される燃料で、相手に脅威を与えるほどの原爆ができるほどの材料はなかったことは、誰の目にも明らかです。両方合わせて七十キログラムと言われています。七十キログラムあれば、確かに二発の原爆ができるのです。ところが、一発は、実験してみなければなりません。そうすると、あと一発しかないわけです。しかも秘密裡にミスユースできるかどうか、分かりません。ですから、私は暴挙だと思っているのです。

**板垣**　暴挙とはいっても、イラクに対する警告という象徴的意味を与えようとしたのでしょうね。

**佐藤**　イラクにも、サウジにも警告を与えたことになります。

イスラエルのイラク爆撃でみせた航続距離で、サウジの油田まで壊すことができる、ということを見せたわけです。実際、サウジの代表が英国に行き、戦闘機を買うとかいう問題が起きていましたから。そのことに対して先制攻撃をかけたということでもあります。

**板垣**　運搬手段という点ではどうですか。仮にイラクが原爆を持ったとして、それでイスラエルを攻撃するための運搬手段という意味でですが……。

**佐藤**　大型の輸送機があれば理窟のうえでは運搬手段になるわけです。パキスタンなどの場合、もうすでに運搬できるということです。輸送機を使ってやればいいというのです。実は、輸送機というのは、のろのろとでかい図体を進めていくのですから、落とされる可能性はありますが、できないことではありません。

このあいだのアフガニスタンに対するソ連の侵攻問題が起きた時、米国はパキスタンに軍事援助の提供を申し入れました。アフガニスタンとの関係での軍事援助とアメリカは考えるのですが、パキスタンの方は、最新鋭の戦闘爆撃機を提供しろと要請しました。それを入手しておけば、後でパキスタンが原爆開発に成功した時に利用できるわけです。そういう意味で、武器輸出の役割は非常に大きいのです。単に通常兵器として輸出したものでも、通常兵器としての機能に止まるものではないのです。

**板垣**　核兵器の体系と通常兵器の体系とを、はっきり分けることはできないということですね。

**佐藤**　できません。やはり、一番の問題は、こちらでは通常兵器だと言って最新のものを売りに出すわけですが、他方で核兵器を持つことはやめろと言っても、それは別の次元ですから、阻止できません。現在の状態では、或る国がいったん核武装を決意すれば阻止することはきわめて困難です。

そのうえ、フランスは、今後は高濃縮ウランを材料とした原子炉の輸出をやめると言っていますが、しかし、石油が欲しいのとミラージュを売り込みたいからこそ、あのような原子炉建設協力などをやっていたのですから……。それから、原子力の平和利用をやるということは、スピンオフというのか波及効果をもち、いろんな分野での技術水準の向上につながるのですから、イラクがそれをやることと自体にとやかく言うことはできないわけです。そのうえイラクはNPT条約に入っているのですから。NPTの加盟国に攻撃を加えるという暴挙を犯したイスラエルの行為は、重大な国際法違反であると同時に、多くの問題を今後に残したといえます。

## 孤立打開の暴挙

**板垣**　くり返して申しますが、イスラエルがいわゆる「バビロン作戦」の名においてイラク原子炉の破壊に踏み切る時期、形式の選択は、短期的には大変精密な計算に裏付けられていただろうと思います。ところがそれは、目先の状況に対する働きかけとしては十分によく練られたプランだったとしても、ほんの少し時間の幅を引き延ばしてみると、はなはだ愚劣な、先見性のない決定であったと言わなければなりません。そのツケは非常に高いものになって将来のイスラエルにはね返っていくことになるでしょう。

イスラエル軍部は日本の真珠湾攻撃を研究して、一九六七年六月の戦争での先制奇襲攻撃にもそれを一つの参考にしたと言われているのですが、今度の攻撃もその研究をフルに活かしたという感じがあります。イスラエルの国民は「第二のホロコーストの危険」が宣伝される圧迫された心理状態のもとにあって、イラクの原子炉を破壊したということで単純に喜んでしまう。これは外側からみれば、第二に、今回の原子炉破壊攻撃は、原子力の平和利用に対して、計り知れざる不安感を与え、原子力の開発のみならず、中東問題に暗い影を投げかけた。世界の平和と繁栄のためにも、いかん極まりない行為である。

### 放射能戦争の恐怖

**上田　哲**（社会党）

原子炉の奇襲爆撃は、放射能戦争の新たな恐怖を世界に教えた。この暴挙は、どのような理由をつけても、許されるものではない。

第一に、イスラエルの独善的な野蛮さを明らかにした。第二に、中東和平に重大な打撃を与えた。第三に、イスラエルとレーガン政権との危険なつながりを明らかにした。アラブ諸国が結束を固め、キャンプ・デービッド合意をうち破り、真の中東安定のために、立ち上がることを期待する。

### 国連で制裁を

**宇都宮徳馬**（新政クラブ）

イラクを全く理由なしに爆撃するというのは、明らかな侵略だ。だから、国連で、当然制裁するべきだ。その決定にアメリカは拒否権を使うだろうが、日本の政府は制裁を支持しなければならない。この前、鄧小平副首席に会ったとき、彼もアメリカがイスラエルや南ア、それに韓国の政府を支持したりしているが、これは愚かである、と言っていた。

＊本誌では日本パレスチナ友好議員連盟の役員を中心に、今度の事件をどう見るか、談話をお願いした。ただ、不在のため数名の方からは頂くことができなかった（アイウエオ順、敬称略）。

### 侵略行為を糾弾

**飛鳥田一雄**（社会党）

イスラエルの行為は、明白な侵略行為であり、そもそも平和五原則に反する。それ故激しく糾弾され、国連で制裁決議がなされるべきだと思う。

これを、日本政府に強く要求する。特に経済制裁とともに、アメリカから輸出された攻撃機が使われたという点から、武器の輸出禁止を要求する。

我々日本社会党は、今後いっそう世界の平和のために働くものである。

### 極めて悪質な行為

**岩動　道行**（自民党）

まず第一に、今回のイラク原子炉爆破行為は国際法違反であり、極めて悪質な行為である。この件については、国連で厳しく対応措置がとられることを希望する。そもそも、それぞれの国の安全保障はその国の安全保障であると同時に、すべての国のものでもある。従って、イスラエルのみの安全保障というものはありえない。

いささかどうしようもない心理状態に落ちいっているとしか、言いようがない。つまり、満州事変あたりから太平洋戦争にかけて日本国民の動向を外側から客観的に観察した人が感じたに違いないものと同じものを今、逆にわれわれがイスラエルに対して感じているのではないか――。イスラエルの国内の動向を考えていくときに、日本が戦争や領土拡大に向かってどんどん突き進んでいった時の反省をむしろ迫られる面があるということを忘れるべきではないでしょう。そのことを踏まえつつ、日本からイスラエルの人々に何かを言うべきなんじゃないかと感じているんです。

　ところで、このことの背景を考えてみますと、イスラエルが置かれていた状況は、国内的にも国際的にも大変行き詰まっていたということがまず注目されるべきだと思います。六月末の総選挙ではイスラエル労働党の再登場の可能性も云々されることになっていました。その根底にあるイスラエルの経済的混乱――世界でも例をみないような高いインフレのためにイスラエルを見限って国を出る市民も出るほどの状態――が、国内政治の行き詰まりを生んでいたと思うんですね。

　それは国際的にも連動しているわけです。ベギン政権が占領地の強硬入植政策を推進してきた。さらには去年の夏、今までの国際的な成り行きを全く無視して、エルサレム法によって、一方的にエルサレムを永久首都化する宣言をした――そういうことにつながってきているのです。

　ところが、エルサレムに大使館をおいていたすべての国が引きあげたり、ECではPLOを中東和平問題の当事者として引き入れ、承認する方向がはっきり出てくる。そのためにベギン政権はいわば八ツ当たり的に、ドイツのシュミット批判をやったり、イスラエルに対しては伝統的な支持の立場を維持してきたはずのオランダの外務大臣を非難してみたり――という格好でヨーロッパ側も敵にまわすような状況になってきた。そこへイギリス駐在のアラブ大使会議の議長に、ロンドン駐在のPLO代表が就任するというようなことになってヨーロッパの中でのいろいろな変化が際立ってきた。日本もいろいろと工作する動きをみせています。いわばイスラエルの孤立化が進んできたということです。

　そういう孤立化を打開する思いきった動きが、選挙に向かって求められるという状況だったのです。それが一つの背景としてあります。

## 危機に操られ

　思いきった出口の模索をせざるを得なかった背景のもう一つは、キャンプ・デービッド体制の解体が、だれの目にも明らかになったことにあります。イスラエルとエジプトの間では一応平和条約の調印やシナイ半島の領地返還のプログラム作りなど、進展はみられたものの、それは二国間の変化だけに留まって、結果としてエジプトの孤立化に終ってしまっているという状況があったと思うんです。

　そういう状況の中で、ベギン政権が選挙を目前にして打った手は、レバノン危機を操るという方策だったわけです。レバノン内部のファランジスト勢力を利用しながら、レバノンにおけるパレスチナ人追出しを強化する。そしてシリアの国際的孤立を促進させるという方法が目指されたと思うのです。それはある意味では、ヘイグ国務長官の中東訪問をきっかけにしてイスラエルが踏み切ったと言えます。ところが実際には四月から五月の状況というのは、ミサイル危機と呼ばれることで明らかなように、イスラエルがレバノン危機を操って主導権を握ることに失敗してしまったものです。

　シリアのヘリコプターを落とし、それに対応してシリアはソ連製のミサイルを持ちこむ――という格好でミサイル危機は進行していったということになっているわけですが、このプロセスの中で一番大事なのは、中東の問題やレバノン危機、さらにはパレスチナ問題に関して、ソ連が新しい役割を演じるようになった――四月以降においては、アメリカはソ連と話し合わなければレバノンを中心としての中東の危機の管理ができないという状態になった、ということです。

　そういう状況の変化を引き出したという点では、それまでにみられた中東における孤立状態を、アサド大統領は劇的に転換させる役割を演じたということが言えると思います。ですからたちまちにして、そういう方向への動きをみながら、クウェートの外務大臣がモスクワを訪問するとか、オマーンなども含めた湾岸諸国が大国の軍事的な傘を断る自主的な方向を求めるとかいう動きがでてくる。またその全体的な流れの中でサウジアラビアがソ連に接近するということも起こってきたわけです。

## 長期的な破綻

　出口として設定したレバノン危機が、これらの国内的、国際的行き詰まりを打開する役に立たないということになってきたところで、フランスの大統領選挙が行なわれました。このフランス新政権は一体どっちへ動いていくのだろうかと、イスラエル政権とその周辺はまだはっきりと見定めかねていたという面もあると思うのです。

　しかしフランスの大統領選挙を通じて、確かに新しい兆が生まれたので、それを拡大する方向を考えるという見方は、当然あったと思うのです。その中でアラブ諸国に対するフランスの経済的、軍事的さらには政治的な接近の見直しがもっと促進されるような、特に象徴的なものとしてイラクの核開発に対するフランスの援助への見直しの働きかけが生まれてきたんですね。

　だから確かにイラクの核開発のこれまでの過程で、イスラエルは阻止する努力を重ねたと思いますし、イラン・イラク戦争の過程で、原子力施設の破壊をかなり具体的に考えたこともあったと思いますし、そうした計画をいろいろ練ってきたことも事実でしょう。ただその問題が大きく浮かんできたというのは、フランスの大統領選挙のあとの状況判断があったからだと思います。

　さらにはアフガニスタンにおけるソ連の行き詰まり状態とか、イラン・イラク戦争における状況判断、特にイランにおけるバニサドル大統領の大幅な後退に伴う政治状況の緊迫とか、ポーランドの状況――これらを全体として睨んだ上で、イラクの原子炉がいつから運転されるかということは、必ずしも関係なく、しかしそれを口実にして、選挙に象徴されるイスラエル内部の政治的危機の非常に劇的な転換を、あの行動によって求めたと言えると思います。

　しかし、最初に言ったように目先の効果は非常に大きいものですが、いずれ破綻することは間違いないと思います。

（6月15日収録、文責・編集部）

### 全くの暴挙

**草川　昭三**（公明党）

　イスラエルによるイラクの原子炉爆撃というのは、全くの暴挙である。これを黙認すれば、イスラエルは世界中のあらゆるところを、単に自国にとって危険になるかもしれないという予測だけで攻撃できるということになる。日本政府は、イスラエルの南部レバノン爆撃や、今日の事件のような国際法侵犯行為に、何らかの有効な手だてを考えるべきである。

### 横暴の極まり

**秦　豊**（社民連）

　ベギンが何を言おうと、何を口実にしようと、とにかく横暴の極。論理とか理念、安全保障、民族の生存や民族の論理というものを全く越えた次元の、これほど横暴で非道なことが国の名のもとに行なわれたということは、かつてない。

　天人ともに許さず、という日本の古来の言葉にあてはまる悪業であると、口を窮めて言いたい。

### 平和への挑戦

**山口　淑子**（自民党）

　アラブの大使がたの主張は、非常にもっともだ。

　まず第一に、国際法、国際社会のルールに違反している。これから、国連の安保理で、何らかの決議をとり、イスラエルの反省を求めることが絶対必要だ。平和を破壊する挑戦というのは許すべきものではない。イスラエルには核拡散防止条約に加盟するよう求めたい。

<スクラップ帳>　大荒れイスラエル総選挙

大荒れ　イスラエル選挙戦

事務所放火や暴力

急伸の右派　労働党ねらい打ち

「パレスチナ」など争点吹っ飛ぶ

【カイロ二十六日＝伊藤（正）特派員】イスラエルの対アラブ強硬姿勢が継続されるかどうかで注目されているイスラエルの総選挙は、暴力による選挙妨害が相次ぎ、「民主主義の危機」の様相を呈してきた。暴力は主として左派の労働党に向けられ、選挙事務所への乱入や焼き打ち、選挙カーの打ちこわしが発生している。このためアラブとの共存など重要な争点は吹き飛んだ形となっている。

ベギン首相

ペレス労働党党首

　三十日の投票日を五日後に控えた二十五日、保守派のリクードを率いるベギン首相と、野党第一党の労働党ペレス党首の間でテレビ討論が行われた。テルアビブからの報道によると、ペレス氏は「イスラエル始まって以来の、暴力的かつ侮辱的な選挙」と述べ、その責任は暴力分子をあおっているベギン首相にあると決めつけた。

　これに対して、同首相は「私の人格を葬ろうとしている」と激しく切り返した。労働党が最もショックを受けたのは、ギバト・シュムエルの選挙事務所の焼き打ちで、ほかに集団による個人演説会場への殴り込みが起こっている。

　暴力事件の背景として、イスラエル国内における右派の著しい勢力伸長がある。ベギン首相の一連の対外強硬政策、つまりレバノン危機におけるシリアに対する威嚇政策、イラクの原子炉爆撃強行、国内ではアラブ人の居住区である西岸地区へのユダヤ人入植などが、イスラエルの貧困層を中心にうけている。

　これに反してヨルダン川西岸（イスラエル占領地）をヨルダンに返還し、イラク爆撃のような冒険主義に反対だと主張する労働党は意気が上がらない。

　今回の選挙の争点にはイスラエルの国家としての分岐点を決めるものが少なくない。第一はエジプトとの和平に伴うアラブとの共存の問題、第二はパレスチナ人への自治権の付与、第三はアラブを刺激している西岸への入植問題、第四は激しく傾いている国家経済の立て直しである。

　政権党リクードはエジプトとの平和条約締結によって、アラブとの軍事的バランスはイスラエルの絶対優位に変わったことを宣伝し、アラブとの共存を口にしなくなっている。ベギン首相はフセイン・ヨルダン国王やパレスチナ解放機構（PLO）のアラファト議長に西岸地区を与えることはないと明言した。

　このタカ派路線が有権者を引き付けていたところに、レバノン危機が起こり、イラク原子炉の爆撃が敢行され、アラブとの共存についての理性的な話し合いはどこかに吹き飛んでしまった。

　有力紙イディオト・アハロノトが二十六日発表した政党支持率調査によると、リクードは三九％、労働党は三三％となり、リクードが完全にリードしている。これに対して労働党は、支持政党未定の浮動票が三〇％あるのを頼みにしている。警官に守られなければ街頭演説ができなくなった労働党は、「ベギン政権が次の四年間居座ると、イスラエルはファシズム国家になる」と宣伝、浮動層のリベラル派をつかもうとしている。

――「朝日新聞」6月27日国際らんトップ

好評新刊！
創刊号に賭けた十人の編集者
◆時代を征覇しようとする野心、新しい創造に情熱を燃やす編集者たち……
塩澤実信著
四六判上製●1500円
ロマンス社と「ロマンス」
平凡出版と「平凡」
暮しの手帖社と「暮しの手帖」
朝日新聞社と「朝日ジャーナル」
平凡社と「太陽」
中央公論社と「海」
小学館と「GORO」
集英社と「月刊PLAYBOY」
主婦と生活社と「angle」
青春出版社と「BIG tomorrow」
流動出版
〒105 港区愛宕1-2-2
電話 03-433-7461(代)

# イスラエル・南アの核武装同盟

## ホロコーストを目論む二つの人種主義国家

**一九七九年九月の南ア沖の謎の閃光は、超長距離射程砲（ERFB）によって発射された原爆だった。これの登場によって、南アフリカ共和国とイスラエルの核支配構造は、大きな転換点を迎えた。**
**このERFBをいかにして南アが保有することにな**

### 謎の閃光

一九七九年九月二十二日、アメリカのヴェラ偵察人工衛星は、原子爆弾の爆発を確認した。ヴェラの光学感知機は、二度の閃光を記録したが、それは核爆発に特徴的な、ふたこぶ曲線を描いていた。これが後にイスラエルと南アの核同盟による原爆実験と伝えられることになる。

CIAは、同日夜に南アフリカ共和国（以下「南ア」）の艦船が、爆発地点で、秘密訓練を実施したことを知っていた。CIAは爆発高度が八キロ上空であったことを知った。

この発見は、後に南アとイスラエル国内の消息筋によって確認されたが、この核爆発が投下爆弾によるものでも、ミサイルによるものでもないことが明らかになった。ミサイルだとしたら、アメリカの早期警戒人工衛星がロケットの噴射の航跡をキャッチしていたはずである。

こうしてこの事件は、単に核保有国が一つ（あるいは二つ）増えたというショックだけでなく、このような核爆弾発射装置が、どこから、どのようにして当事国の手に渡ったのかという点に大きな関心を呼び起こしたのである。

あらゆる情報と可能性を検討した結果、デービッド・ベイカー博士（イギリス核戦略研究の第一人者）は次のただ一つの結論に到達した。

「あれは、船舶に据えられた大砲から発射推進された、超長距離砲弾（ERFB）であったとしか判定しようがない」と。またアメリカの核弾道計画にたずさわっていたジョン・ウルフは、より正確に語っている。

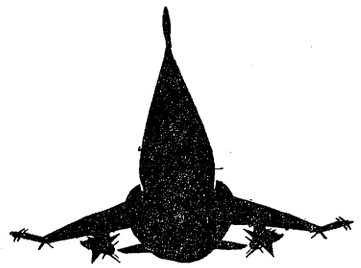
「あれは、宇宙研究財団（SRC）が製作した、超長距離砲弾（拡大射程砲弾）に間違いない」と。

### 核爆弾発射装置 ERFBの密輸計画

ここで問題になっているERFB一五五ミリ砲は、SRCによって設計され、実験が行なわれ、製造されたものである。SRCは、アメリカ政府の助成金と、アメリカ、カナダの両国から防衛契約金とを受けた、米加協同開発会社である。そしてこのSRCが、総額五千万ドルで、南ア共和国にERFBの射程六十キロの一五五ミリ砲を六十基、そして世界最新の曲射砲であるGC45の技術を売却したのである。そしてこの売却に関して、対南ア禁輸の網をかいくぐって、CIA、国防総省、国務省、イスラエル政府、ヨーロッパの諸会社、南アにあるイギリス系子会社が、SRCを助けたという事実が明るみに出たわけである。

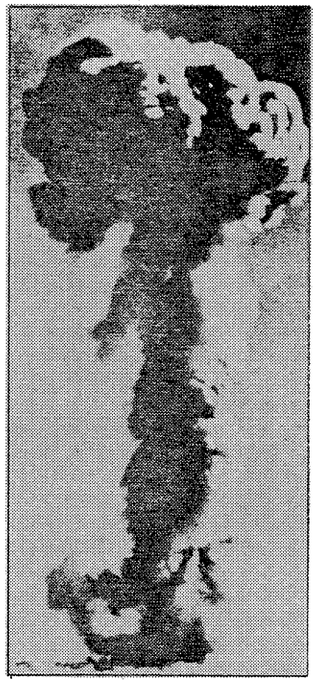
この巨大な密輸が暴露された時、SRCはアメリカで起訴され、罰金刑の上、幹部は投獄されることになった。しかし、この裁判は一切公けにされず、SRCの情報は秘密裡に処理され、核開発事業の最高機密は闇に葬られたのである。明らかに複数の大きな圧力がかかった結果と言える。

核砲弾の装塡可能な超長距離砲と









いう兵器の密輸計画は、一九七六年の初期に、リオデジャネイロで、SRCと、その在欧協力団体であるPRB（ベルギーの兵器販売組織）とによって立てられた。テーマは法も税関規制も侵さずに、南アにこの超兵器を渡す方法についてであった。

その計画に基いて、この兵器は、イスラエルに対する防衛協約の受注という形で、アメリカのSRCの兵器製造プラントで製造され、粗鋼鍛造品というカムフラージュのもとに認可もなしにカナダに輸出され、SRCのバルバドス試験場で砲弾部を完成し、イスラエルに船積みされ、そこで核爆弾と推進部が装塡され、そして最後に南アに輸送されたのである。（バルバドスはカリブ海の国）

この計画は当初一点の非のうち所もない形で進められていたが、二つの政治事件が計画を阻んだ。一つはバルバドスに、親アラブ、反米傾向を持った新政権が誕生したことであり、もう一つは、イスラエルの労働党政権（ラビン首相）の急速な弱体化である。

急場しのぎを迫られたSRCは、イスラエルから別の経路で南アにこの兵器を輸送した。しかしこのため、この密輸が見破られてしまったのである。

### アフリカ支配の兵器

しかしここに、もう一つ不運が起こる。一九七九年九月に、イスラエルと南アは、この兵器の実験を行なおうとしていた。そのとき上空にいたヴェラ人工衛星は、核実験禁止条約が順守されているかどうか監視するために軌道に乗せられていたものだったが、このヴェラがちょうどその時、軌道をはずしてしまったのだ。そのために偶然、ヴェラは軌道外の核爆発をキャッチしてしまったのである。

SRCと南ア・イスラエルとの結びつきの歴史は、そもそもSRCとイスラエルの強力な関係の前史を持っている。一九七三年の十月戦争の間、イスラエルはSRC製作の一七五ミリ砲爆弾で、シリアのダマスカスを攻撃したのである。このERFBと呼ばれる超長距離砲（核弾頭装塡可能）は、ゴラン高原のイスラエル司令部に送るために、特別設計されたものであり、これはラビンがまだ駐米大使であった頃に、ワシントンでキッシンジャーに要請した戦略的砲撃爆弾である。

一九七五年にイスラエルは、一七五ミリ発射システムを、追加注文した。SRCのような私企業は、弾薬製造を許可されていなかったが、SRCは友好国の代理人であるとして、ペンシルバニア州スクラントンにある米陸軍の施設を使って、千五百発の砲撃爆弾が製造されたのである。

アメリカがこの兵器の重要性をはっきり認識したのは、アンゴラ内戦においてである。

ソ連が後押しするMPLA（アンゴラ解放人民運動）と対決するため、アメリカは秘密裡に南アの侵攻部隊を援助したのだが、この南アの最新精鋭部隊は、ソビエト製の一一二ミリ砲と一三〇ミリ砲の前に、屈辱的な退却を喫したのである。キッシンジャー＝フォルスター（南ア首相）計画は南アが超長距離射程砲を持たないために、失敗に終ったのである。

急速に抬頭する黒人国家に取り囲まれ、アンゴラの大敗北によって危機感をつのらせていた南アは、CIAに働きかけた。南アの死の商人であるデニス・ゼーデルベルグは、CIAの暗号名でYQガンマン1と呼ばれているが、ジャック・フロスト米陸軍大佐とバンコックで接触し、そこでフロストがSRCの一五五ミリ砲システムを推したのである。四十キロの射程と、高度の命中精度を誇るこの砲は、他のアフリカ諸国のどの兵器にも勝っており、おまけに小型化された核砲弾用のコンポーネントを完成させていた。

こうしてこの砲システムは、南アにこの地域の完全な支配権を与えるだけでなく、戦術的な核兵器をも持たせることになったのである。

### 南アへの輸送は暴露されていた

申し出を受けたSRCは、この売

却を大歓迎した。当時SRCは二千万ドルの負債をかかえていたからである。一九七六年四月に契約（コレット＝パラゴン協定）は結ばれ、支払いと輸送を決定した。

この協定の二日後、南アのフォルスター首相はイスラエルを公式訪問した。敵に取り囲まれ、絶滅の脅威にさらされている、この人種差別のアパルトヘイト共和国とシオニスト国家は、結婚したのである。そして核開発の協力が最重要課題とされたのであった。

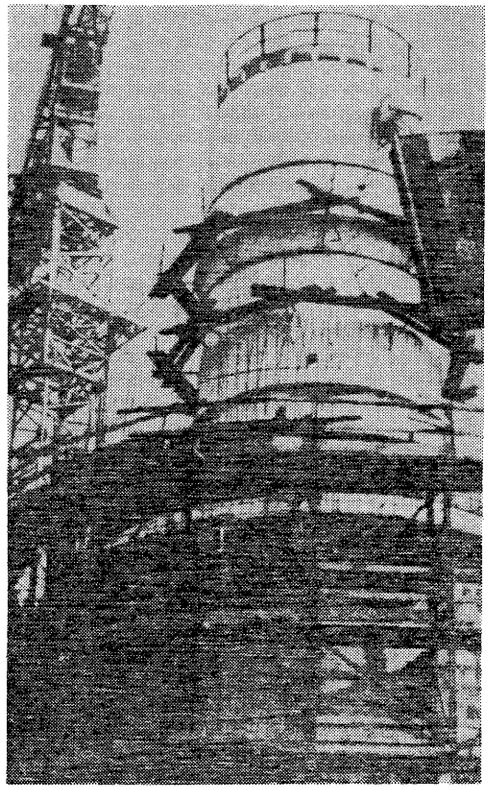
製作されたシステムは、カナダのケベックで砲弾完成を待ち、親アラブ政権の誕生したバルバドスを避けて、アンティグアの実験場でテストされ、一九七七年の二月までにこのシステム（五千発の砲弾を含む）は、ツィム（イスラエル船舶会社）に積まれ、イスラエルに向けて出航することになっていた。ところがその時イスラエルは総選挙前で、労働党がまさに政権を失おうとし、内部矛盾が吹き出ていた時で、さらにカーター政権の圧力を受け、この積み降ろしを断念せざるをえなかった。

兵器のコンテナは、アンティグアのセント・ジョーンズ港で南アの船に積み変えられ、西ドイツの国旗を掲げ、行先をカナダとしていたが、これは余りにも急場しのぎの作戦だった。この段階で、港湾労働者も、米加の両税関も、何が積まれているか見破っていたのである。

残りの砲弾はスペイン経由で送られた。そしてこのあと、南アの兵器商アームスコーは、SRCの砲弾を自力で製造するシステムを作りあげた。イギリスのセメンテーション工業会社の協力と、独仏の機械によって、砲弾は生産工程に入っていた。

大砲の部分も生産され、一九七九年に南アは、G5と呼ばれる一五五ミリ砲を軍事展開し、SWAPO（南西アフリカ人民機構）に対しての攻撃で、その威力を実証した。

しかし前述したとおり、これは通常弾頭の発射装置であるだけでなく戦略核兵器でもある。これを手に入れたイスラエルと南アの両国は、兵器分析家のマーヴィン・セトロンの言葉によれば、「それを実験したくなるのも当然」だったのである。こうしてヴェラ衛星が、核爆発をキャッチすることになる。CIAと国防総省は、これが二～四キロトン級の核実験であると結論を下したのである。


イスラエルのディモナの核プラント

## イスラエルの核開発

一方イスラエルの核開発の実態はどうであろうか。一九七八年のCIA発表によると、すでに一九七四年に、イスラエルが〝秘密手段〟によって手に入れたウランを使って、核兵器を生産していると結論を下していたことが明らかになっている。

一九七六年に、西独の軍事月刊誌『ヴェール・テヒニク』は「今まで単なる推測だと見なされていたことが、厳然たる事実であることが明らかになった。つまりイスラエルが、原爆、正確に言えば十二個の原爆を保有していることが事実となったのである。これは各々二十キロトン級の爆発能力を持ち、それは、ヒロシマ、ナガサキに落とされた原爆一個ずつに匹敵する。これらの原爆は、イスラエル製戦闘機クフィルやファントムで、目標まで運ぶようになっている。両機種とも、この目的の特別装備を持っているのだ」

すでに一九五七年、イスラエル政府は、ネゲブ荒地のディモナに、二十六メガワットの原子炉を建設するという、ベン・グリオン首相の提案を承認した。フランスが当時、南アに二基の原子炉を建設していたが、





ディモナの建設も引き受けた。

## 消えたウラン

一九七六年、アメリカ核規制委（NRC）は、八千ポンド相当の高濃縮ウランとプルトニウムが、核施設から消えていると発表した。これについて数人の下院議員は、これらが〝転送〟されたと確信しており、さらにCIAとDIA（国防総省情報局）は、イスラエルがその転送先である証拠をつかんでいる。

疑惑の焦点となったのは、奇しくもベン・グリオンが核開発を発表したのと同じ一九五七年に設立された核燃料設備会社（NUMEC）であり、この設立者はザルマン・シャピロ博士という熱烈なシオニストで、米海軍の核研究計画のスタッフである。そして一九六五年までの調査でNRCと原子力委員会（AEC）は少く見積っても二千ポンドの濃縮ウランがNUMECの責任であるという確証をつかんだ。NUMECは、イスラエルの技師を雇い、彼らに訓練をしていたという事実も明らかにされた。

最終的に、シャピロ博士は、核燃料紛失の賠償として百十万ドルを米政府に支払い、NUMECを売却した。しかし彼は、イスラエルへの〝転送〟については否認した。NUMECの高濃縮ウランは、灰色の粉末が、パレット状になっており、放射能も低く、盗み出しは非常に簡単であった。

十年後の一九七七年、CIA科学技術部門の副官であったカール・デュケットは、次の内容をマスコミに漏らした。NUMECのウラン紛失と、イスラエルの核兵器開発の時期が同じであることにCIAが気付いていたこと、CIA長官リチャード・ヘルムズから知らされたジョンソン大統領は「誰にも言ってはならぬ。ラスク国務長官にも、マクナマラ国防長官にもだ」と述べたという。

こうしてNUMECが役に立たなくなったあと、イスラエル諜報部モサドは、一九六〇年代後半に、英仏のウランをハイジャックするための特別部隊を設けた。しかし南アとの同盟が進んだあとは、もっと確実にウランがイスラエルに流れることになったのである。

## イスラエル・南アの核同盟

一九七六年に南アのフォルスター首相がイスラエルを公式訪問し、軍事・科学技術に関する諸協定に調印した後、両国の貿易ブームが始まった。目玉商品はダイヤモンドと武器である。世界有数のダイヤ加工地であるイスラエルは、原料供給地を獲得したのであり、その製品は日本にも多く流れている。また南アはイスラエルから、すでに五億ドル以上の武器を買いつけた。その中にはウジ自動小銃、対ゲリラ警戒システム、デュブル及びラシェフ砲艦、ライフル、臼砲、ガブリエル・ミサイルなどが含まれている。

一九八〇年三月、イスラエルの著名なジャーナリストであるエリ・テイヘルとアミ・ドロンによる「われわれは誰も生き残らぬ――イスラエル原爆物語」という本が、イスラエルで発禁になった。その中では南アとイスラエルの原爆開発協力の様子が詳しく書かれていたという。

一九七七年に南アがカラハリ砂漠で実験の用意をしていた原爆は、イスラエル製であることが、米情報筋によって暴露された。しかしこれは事前にソ連のスパイ衛星に発見され、取りやめになった。

これでこの報告は終る。まだ解明されていない点も、やがて明らかになるだろう。

（参考文献『ミドル・イースト』誌一九八〇年六月号、八一年四月号）

まとめ＝本誌編集部　広河隆一
園美抄子

インパクト⑫
700円
全共闘の屍を超えて
右傾化の中の全国学園闘争
全共闘以降十年、学園における帝国主義的再編は様々な形態と段階をとりながら、学生と学問への管理支配を強めている。それに抗する「全共闘なんて知らない」世代の新たな闘いの質とは何か。日大・東大など、全国の大学現場からの学生自身による闘いの報告。
千葉動労のたたかいと処分
――国鉄新潟闘争の場合と対比して
七〇年代フレームアップ事件の現在
七〇年代のアラブ支配階級
連載
労働統計を読む(7)――日本資本主義の柔構造的性格　山田芳郎
カリブ海域解放綱領のために　G・アンチオプ
吉本隆明論　田川建三
運動情報・小西反軍裁判・無罪を勝ちとる（小西誠）、八〇年代教育管理体制に「否」を（村上和夫）、黒豹党・過去と現在（イーラム）ほか
高島喜久男
佐古幸隆
ジャアキル
イザラ書房03-811-8753
購読6号分4200円
東京（0）148025
定期購読振替

# 牟田口義郎氏（朝日新聞 前論説委員）の語る

# 中東取材25年

**「人生のポイントで必ず戦争が起こっている」と、中東報道二十五年のベテランの論説委員（前）は、しみじみと述懐される。ナセルの死、パレスチナ人との出会いから日本の中東報道への姿勢まで、よどみなく語られる数々の「こぼれ話」は、一人の老練なジャーナリストの半生を、まばゆいばかりに織りなしてゆく。（編集部）**

## 中東取材事始め

大学時代、中東問題など全く知りませんでした。新聞記者になる前は、旧制高校の非常勤講師をしていましたが、当時（昭和二十四年）、月給は千二百円ぽっちでした。これでは家族を養えないので、人にすすめられ新聞社の試験を受けたのです。

新聞記者になった以上、海外特派員をやりたいとは思っていましたが、フランス文学科出身だから、パリの特派員になればいいと思っていました。ところが、新聞社の事情で、中東をやることになったのです。

初めてカイロに行ったのは昭和三十二年六月でした。最初の印象はカイロは東京より遙かにモダンで国際的な街だということでした。エトワール式に都市計画され、整備された街並が、また異質でした。鉄道にしても、日本より早く敷けていますし、新聞にしても、「アル＝アハラム」は、日本で一番古い新聞よりも古いのです。そういう点で、文化的内容については、大変進んでいて、机の上で勉強した低開発地域というイメージと違うので驚きました。

その頃はナセルの全盛の時代で、カイロには世界各地の解放組織が集まっていました。アルジェリアが独立宣言して臨時政府を作るのにも立ち会いました。それから十数年経って、アルジェリアでブーメディエン大統領に会いましたが、ブーメディエンにインタビューした日本人記者というのは、私が最初で最後かもしれませんね。アルジェリアの臨時政府樹立宣言の時に、私がすでに取材していたということがわかったので、相手は私を信用してくれて、そのおかげでブーメディエンに二、三日して会えたというわけです。

私を中東に引き戻したのは、六日戦争でした。大阪で学芸部次長をしていたところを呼び戻されたのです。二年間、東京・大阪で過ごして、管理職の道を歩むことになっていたところで、あの戦争が起きたのです。そのとき外報部に、中東の現地を体験していた記者がいなかったのです。

私の人生のポイントのところで、必ず戦争が起こっているようです。第二次中東戦争（一九五六、昭和三十一年）が起こったため、社命により調査研究室で中東の勉強を始め、第三次中東戦争（六日戦争、一九六七年）の時は、大阪にいたのに戻されたのだし、パリで特派員をしていると、いわゆるブラック・セプテンバー（一九七〇年、九月のヨルダンでのパレスチナ人弾圧）が起こって中東へ引き戻されることになります。九月のある日曜日に、フランス人に田舎の別荘に招待され、車でパリに戻る途中、カー・ラジオを入れたら、ヨーロッパの上空で一日に三機がハイジャックされたニュースが入ってきました。そのあと、ヨルダンの内乱が始まりました。

その時は同僚の笹川（正博）君がカイロから出張して、アンマンのインターコンチネンタル・ホテルに籠っていました。すると、このホテルが戦場になってしまったのです。アンマンは谷間の街で、このホテルの丘を挟んでPLOとヨルダン軍が、砲撃し合うのです。そして砲弾がホテルに落ちたりするので、報道が全く不可能になってしまいました。西側の報道人約八十人が孤立したそうです。笹川を救出せよ、同時に報道の任に当れ、と私は命じられたのですが、ヨルダンには入れませんでしたから、ベイルートの通信社に籠りっきりでカバーしました。

24 フィラスティン・びらーでぃ

## ナセルの死

危機を脱して、笹川君は国連の最後の救出機で帰ってくると、私たちのホテルに現れ、ナセルがアラブ緊急首脳会議を開いてヨルダン内戦を討議するからと、すぐにカイロに飛んでしまいました。すると、その次に東京新聞の特派員がヨルダンから逃げ帰ってきたので彼の歓迎会をやろうと、ベイルートのハムラの奥のスペイン料理屋に出かけました。

そこで、八時前だったでしょうか、庭でパエラを食べているとボーイたちがどっと現れ、気分を出してつけていたろうそくを、片端から消し「クローズ、クローズ」と連発するのです。「何だ」と聞き返すと、「ナセル・イズ・デッド」と言うんです。びっくりしましたね。「カイロ放送がナセルの死を報じたから、危いので、閉める」と言うわけです。

**牟田口義郎**（むたぐち・よしろう）**氏**
1923年，神奈川県生まれ。東大文学部仏文科卒業，朝日新聞入社。1957～60年カイロ支局長。68年～71年パリ支局長。つい最近まで論説委員をつとめた。主な著訳書に「アブダラーの知恵」「石油に浮かぶ国」「砂漠の豹イブン・サウド」「オリエントの嵐」「地中海のほとり」「中東の視角」「変わりゆくアラブ」ほか多数。

なにが危いのか分からないが、とにかく、AP通信へ行って確認し、ホテルに帰って打ち合わせしてから、原稿を送ろうということにしました。APへ駆け込む時は店が開いていたのに、出て来たら、全部鎧戸が閉まっていました。すると、爆竹がバンバン鳴り出し、四つ角には、古タイヤを積んで、燃やしていました。爆竹だと思っていたら、鉄砲だったんです。鉄砲を空に向けて撃ちながら、若者たちのデモが通る。血相変えて「ナセルは死なず」と叫んでいる。怖くて逃げ出しましたね。

翌日、バーでビールを飲んでいたら、妙な男が自動小銃をもって入ってきて「ナセルのためにカンパしろ」と言います。ハシーシュで酔っ払って目がとろんとしているんです。気味が悪いから、金を出すと、「ちょっと来い」と誘う。怖くてならないからついていったら、前が海岸通りでした。そこで、立ち小便し始め、片方で銃を持って「おまえは、ナセルのために供養してくれたから、その分だけ撃ってやろう」と言って、ポンポンと鉄砲を撃ち始める。銃口がいつこちらへ向くかとひやひやさせられました。

## パレスチナ人との出会い

パレスチナ人との最初の出会いはアンマンでした。一九五八年でした。アメリカがレバノンに上陸し、イギリスの降下部隊がアンマンに来ていたので、ダマスカスにいた私はアンマンに行けと命じられたのです。その時、アンマンの谷間の斜面にあるスラム街を訪ねると、パレスチナ人の女性たちが、水のある所で、四角い石油かんを水がめの代わりに水汲みをしていました。

それから、道路工事をしているパレスチナ人たちが、つるはしでエンヤラとやっているのですが「ヤホーディ！　ヤホーディ！」というかけ声をかけています。つまり「ユダヤ人め！」と言ってるんです。怨念を感じましたね。これが、パレスチナとの出会いでした。

当時、パレスチナ問題は、アラブにとっては、抑圧された民族の悲劇の〝ショウ・ケース〟みたいに扱われていました。「パレスチナ戦争で負けたけれど、必ず俺たちが取り返してやるぞ。もう少し我慢せよ」と夢を与えて、夢で食わしていたんですね。

25 フィラスティン・びらーでぃ

そしたら、第二次中東戦争でもやられてしまった。それで、夢では食っていけないということが、パレスチナ人に分かってきたから、アラファトなどがガザで運動を起こし、クウェートでPLOの母体を作っていくという方向が出てきたわけです。毛沢東の唱えていた「自力更生」を柱にしながら…。

## フセイニを助けた日本人

戦前、私がまだ大学に入る前に、日本でもイスラムに対する関心が高まったのですが、それは軍事作戦の一環としての研究という形でした。その頃日本は、中国の向こう側の

馬一族というイスラム教勢力と組んで中国のレジスタンスを挟み撃ちにするという計画があったからです。そのためにイスラム教の研究が必要になり、大川周明などが中心になって回教研究所のようなものを作ったのです。

面白いのは戦前戦中の日本の特派員のことです。メッカに変装して入った人間がいるんです。毎日新聞の記者で、榎本桃太郎というのですがイスラム教徒でない日本人がここに入った初めてではないでしょうか。もうひとり、朝日の記者で石山慶治郎という人が、ドイツ駐在特派員でしたが、テヘランに行けと命令されて、トルコ経由で車で行きました。

というのは、パーレビ国王の結婚に親善使節として、朝日新聞が「朝風」という飛行機を飛ばしたのでそれに追いつけということだったのです。

この石山さんは、日本の新聞記者として最初にパレスチナ問題に密接に関わって、パレスチナ人の英雄を助けてもいる人です。パレスチナ民族運動の父と言われる、ハジ・アミン・アル＝フセイニがパレスチナで暴動を起こして、捕まるのですが、密かに脱出して、バグダードに隠れます。一九四一年でしたか、その後フセイニは姿を消して、テヘランに潜みました。それを、どうやら、テヘラン駐在の日本公使がかくまったらしいのです。そこで、石山特派員はちょいちょいフセイニに会って、彼から、シオニズムの危険を、さかんにぶたれるのです。しかし、次第にイランの中立が危くなり、スパイが隠れ家に目をつけたので、フセイニを国外に脱出させようということになりました。深夜フセイニは女装して石山特派員と二人で車に乗ってテヘランを脱出したのです。それでフセイニは無事トルコ領に入りそこからベルリンに出て「フセイニここにあり。アラブ人よ決起せよ」とやったわけです。彼を独伊協力派で戦犯者と決めつけないで、ナショナリズム、レジスタンスの立場から評価し直すべきだと思います。

## アラブの統一と分裂

アラブは統一をめざすかと思うとすぐばらばらになってしまったり、では分裂かと思うと、意外に底の方でパイプがつながっていたりということもあります。

つまりバグダードでのアラブ首脳会議でも、サダトをボイコットしているが、エジプト国民は友であると言っています。だから、エジプト人のアラブ諸国への出稼ぎ人はそのまま居るのです。

カイロ空港に入っている旅客機でも、イラクは運航を停止しましたが、UAEやサウジなどは入れています。それから、サウジの学校教員の約八割はエジプト人だということです。彼らに引き揚げられたら、サウジの学校教育は成り立たなくなってしまいます。民間ベースと政府ベースとは別だという考え方に立っていると言えます。これは古来からの歴史、ウンマ(イスラム共同体)、アラブ・ワヘッド(アラブは一つ)と



いうものなのでしょう。日本のマスコミはすぐ「アラブ特有の分裂」とやりますが、あまり分裂を強調してはいけないと思います。パイプはあるんですから。これがアラビア語国民の強さなんでしょう。

それにしてもアラブがどうして分裂してはいけないんですか。分裂ばかりをアラブについて言い過ぎると思います。アラブ人の本質のようにして……。ラテン・アメリカでもそうです。チリやアルゼンチンがけんかしても、ラテン人の分裂とは言いたてません。それなのにアラブにばかり分裂を強調するのは、近視眼的な解釈でしょう。

イラン・イラク戦争になって、何故イスラム教国どうしがけんかするのか、と騒いでいます。そしたら、あるイスラムの学者が言っていました。「あのう、一言申しますが、第一次大戦、第二次大戦は誰と誰がけんかしたのですか。これ、みなキリスト教国ですよ」と。そして「なぜキリスト教徒は、世界大戦を起こすほど、けんかばかりするのか、という解釈は全然聞いたことがありませんねえ」と言ってました。

## 「故郷」について

朝日新聞は創立百年の記念行事のひとつとして、全国の希望高校で講演会を開いていますが、私は講師の一人としてなるべく地方の高校を選んで、鹿児島とか富山とかに行きました。そのとき、いつも「パレスチナ問題」を取り上げることにし「故郷」の概念をまず話しました。たとえば鹿児島の人は、高卒で出稼ぎに行ったり、東京や大阪の大学に行きます。その人たちは、毎年、盆・暮れに家に帰りますが、盆・暮れ列車がそのためにあることを、あたりまえと思っている。旅の自由、移動の自由は基本的人権として認められていて、国連憲章にも書いてあります。ところが、少なくとも私が知っている世界で一つの国民は帰れない。これがパレスチナ人です。生まれた国へ帰れない、父親の育った家に帰れない。パレスチナ問題とはこういうことだと説明し、盆・暮れに帰れることをあたりまえだと思うな、帰ろうにも帰れないでいる人間のために関心を持ちなさい、と言いますと、じっと聞いていますね。

「ふるさと」意識をもう一度強調して、いかに、人間の意識の原点として「故郷」というものがあるか考えてみる必要があると思います。

しかし、ユダヤ人の故郷意識はインチキです。雑婚していますし…。あれは宗教意識であって、民族意識とは違います。

最近シンポジウムで「ユダヤ」という問題が出てきて、ユダヤ人かユダヤ教徒であるかと論議されますが、本当のユダヤ人、ユダヤ民族はもういません。いると言うならば、中東・北アフリカ地方に住んでいた人間で、その中のごく少数です。パレスチナにローマ時代以来住んでいたのが純粋のユダヤ人といえるでしょう。しかし、このユダヤ人はヘブライ語を忘れ、アラビア語を話していたわけです。

シオニズムは、十九世紀のヨーロッパから生まれたイデオロギーに則してできたひと握りのユダヤ教徒のイデオロギーです。だから、そこには当時まん延していた帝国主義の思想が入っているのは当然です。「土地なき民に、民なき土地を」というスローガンが、ヘルツルの理念でした。虚構の理念から発足しているのです。

現在、イスラエルのシャロンとい

秀英書房
千代田区神田佐久間町3－27 電(863)7508
布川徹郎プロダクション編集
報告 中東の革命と戦争
オリーブと三日月のフロントから——
とにかく ベスト・メンバー がそろった。
定価 一六〇〇円
現代日本の水準で考えられる限りのベスト・メンバーが本書において一直線上に並んだ。現代の熱い鼓動に鋭敏な耳目をそばだてる面々である。これまで一貫して厳密な自己のポリシーに沿いドキュメント映画を手がけてきた布川徹郎をはじめとして、抜群の映像感覚を見せる長田勇市、中東関係では多くの実績を持つ森詠、その機動力と直感で状況をつかみとる豊浦志朗、そして、紅一点であり、的確な史的分析を行なう城川桂子。
さらに、資料・解題編では、北沢正雄、伊達政保、広河隆一、林悟郎、下島英忠、大賀英二の運動をふまえた精確な諸論文が林立し、先の現地レポートの迫力を倍加する。
アラファト・インタヴューの収録も本書中の白眉のひとつ。巻末には、今日現在でわかる限りまで調べ上げた詳細な年表を付す。ともすれば、一過性に終りがちなTVドキュメントを、流動する時代の中に力強く刻印するこの試みには多くの賛同と共鳴が寄せられる事であろう。
●造本——及部克人 ●写真——長田勇市 ●制作進行——松永他加志

う大臣は、パレスチナに八百万のユダヤ人国家を作ろうと言っていますが、拡張する以外に術はないから、西岸やガザ地区を全部取ろうとしています。三千年前の聖書の理論が現在に通ると思っているグーシュ・エムニームなどの連中は時代錯誤を犯しています。

## 「平和のため」の戦争

イスラエルのイラク原子炉攻撃について触れますと、まず第一に、自衛のためには、すべて許されるという理念を、世界の国々が利用したら、人類の破滅につながるのではないか。戦争を防ぐために爆撃するのは戦争をするより道徳的だという考えは極めて危険です。

そこでベギンが悪いかと言ったら、またそこに問題が出てきます。イラク原子炉を爆撃するための手段はアメリカのものであり、やられた方もフランスの手段を借りている。ここの問題を断ち切らないといけないのです。第三世界への核拡散は、核技術の供給国である先進国にとっては、油とのバランスをとることになっています。

第三世界の国々には、核開発よりもっと緊急の課題がたくさんあります。もっと基礎的なテクノロジーを修得して、それで国土開発何ヵ年計画などでやってゆけばよいのです。背伸びして、一発爆弾を作るのは、単にプレスティージのためです。それに、核実験というのは、継続的にやらないと核技術の開発にならないのです。それに最高のテクノロジーを応用するには、富士山のように、すそ野が全部出来上がってはいなければならないということです。

また、イスラエルも怖がることはないのです。イスラエルは広島型の原爆を二十発か三十発を、もうすでに保有しているのだし、自分だけは原爆をもってよいのだ、アラブは絶対にもってはいけない、というのは、暴論です。それをわが国民の平和のため、イラクの平和のためにもこの爆撃は正当だと言っているのですから……。平和というのは美しい言葉ですね。人間は今まで、平和のためにどのくらい戦争をしたのでしょうか。

今度の原子炉爆撃で、日本の新聞が一過性の報道しかしなかったのは、第三世界の側から世界を見るという視点がなかったことが原因でしょう。私は先に中東へ行ってそれからパリに行ったわけですが、先に西欧に行ってたなら、北から南を見るという視座が、意識の中に今でも残っていたのではないかと思います。

# 新日本文学

七月号
六四〇円

東京都中野区東中野1・41・5
☎03（362）8771
新日本文学会



◉ルポ特集——少数者の持続と精神
中公闘争10年目の夏を前にして……駒沢英政
沖電気・指名解雇以後……新納一徳
三里塚処分に抗して……乙坂真知子
神武陵に遣る被差別部落洞村の跡……上野清士

座談会　表現の窓口——文学運動について
上野昂志・菊池章一・小山正純
田所泉・中島誠・鎌田慧

講演　絵の感覚と文の感覚……尾辻克彦

小説　牛乳運搬……上西晴治
めるへん……金泰生
鬼役場　蛇裁判（連載③）……大貫和夫

詩　墳墓……松岡繁雄
棒……麦朝夫

文芸時評　〈少数派〉の文学……宇波彰

映画時評　庶民意識に浸透した愛情の筋道
鈴木志郎康

演劇時評　多層的シェイクスピア像……鴻英良

朴の芽芽で　ウンカ……国分一太郎




# 今月の詩

## わが詩よ

ラシド・フセイン

おれは反対だ
わが国の革命家たちが
小麦の穂をいためつけることに
どんな子供でも
手榴弾を持ち歩くことに

ありし日のラシド・フセイン

おれは反対だ
妹が銃をとることに
そんなことは　断じて許せない
だが　時の兆を見るべき詩人たちの眼が
侵入者の黒い群影を
ひたすら呑みこんでいるとしたら
彼らに何が出来るというのか

おれは　反対だ
少年が　十歳でヒーローになることに
樹々が　爆弾の花を咲かせ
枝々が　処刑台となることに
バラの花園が　塹壕となることに
おれは反対だ　断じて許せるものか
ああ　だが　親しき者たちが
私の青春が　そして私の祖国の大地が
戦火で焼きつくされているゆえに
わが詩さえも　銃となるのを
いかにして　とどめえようか

（関場理一　訳）

### ◇詩人について

ラシド・フセイン（一九三六―一九七七）

パレスチナのガリラヤ地方のマスムスに生まれ、ナザレで高校時代を過ごした。すでに高校生の頃から、詩作を始めた。有名な「おれは反対だ」という作品は、この時代のもの。その後、マスムスに帰り小学校の教師となり、イスラエル内部で活躍をつづけた。

「アル＝ファジール」紙の編集長などを経て、一九六六年にはアメリカに渡り、同六七年にユダヤ系アメリカ人女性のアン・テヴィーと結婚。一九六九年よりニューヨークに住み、ニューヨーク大学に学びながらPLOの仕事を無給で行なう。一九七四年にWAFA（パレスチナ通信社）のニューヨーク特派員となりジャーナリスト・詩人として活躍していた。

ところが一九七七年二月一日、ニューヨークの彼の居間で死体となって発見された。イスラエルの秘密諜報機関（モサド）による暗殺であったと言われる。

彼の生涯と業績については、二年前に、画家のカマル・ボラータ氏が中心となり、「ラシド・フセインの世界」という本にまとめた。

●パレスチナの短篇小説

# 青年の負傷

イブラヒム・アル＝アラム

真里みどり訳

1

「地球が回転を止めることってあるのかしら」

「そんなことは、ありえないよ。人間だって同じさ。働くのを止める訳にはいかないんだ。たったの一日だってね」とサイード医師は腹を立てている妻に向かって言った。もっとも、彼も同じことを自分に向かって、いつも繰り返し呟いていたのだが……。

「だが妻が腹を立てるのも当然だ。どれほど辛い思いをしているのか、この私には見せないようにしている。私が患者に呼び出されて出かける晩が何度もあるが、彼女は、いつまでも寝ないで、私を待っていてくれる。時には、うたたねしてしまうが……。なんてかわいそうな奴だろう」こうつぶやきながら、忘れかけていたことを思い出そうとするような表情をした。

「だが私には、彼女ほど単純には物事を考えられないんだ」と、夫婦であることに良心の呵責を感じるたび毎に、彼はこう考えるのだった。まるで、こう考えることによって、妻に対する自分の罪を贖うことができ、妻の権利を犯してはいないのだということを納得させるかのように。だからこそ彼は、毎年、夏に一回、アンマンにいる妻の両親のもとを訪ねることと、そこから〝第二のハネムーン〟としてヨーロッパに旅行しているではないかと、妻に言いそえるのを忘れなかった。

「もっともっと、あなたと一緒の時間を過ごすことは、私にとっても大切なことなんですよ！」と、彼女は夫に向かって、大声で言い返した。

長男のイッサムが、勉強部屋で授業の復習をしていた。両親の会話の断片が、イッサムの耳にも届き、彼は思わず本から顔を上げた。彼は勉強のことからそれて、両親の夫婦生活や、父と子の関係のあり方などを考えていた。すべてが、うっとうしいとしか言い表わせないもののように、イッサムには思えた。

急に、友人のワリッドの父子関係のことが思い浮んだ。ワリッドの父は農学者であったが、互いにとても親密だったので、よく兄弟のように思われていた。ワリッドは、形式ばった堅苦しさもなく、父親と全く対等に話し合うことができた。

二、三日ほどまえに高等教育の関係者たちとワリッドの父親が行なった、ある会議のことを、イッサムは聞いた。その会議では、大学教育が社会の要求に応えていくために、諸大学間で、もっと協力が必要であることが話し合われたという。

働くことと眠ること――この二つのことだけをよくやっている父親というのが、イッサムにとっては父親の姿に思えた。

学生たちのデモに賛成しなかったし、デモする学生たちを、何の得にもならぬといって、あざわらっていた。彼は口癖のように、昔も大勢の人間がデモをしたけれど、結局のところ、占領状態に何の変化も起きなかったではないか、とも言っていた。

「けれど、どんな形にしろ怒りを表わすことは、黙ったままでいるよりましでしょう」と、ある日、イッサムは父親に言った。



「それはくだらない考えだ。デモで国が解放された話なんか、聞いたためしはないぞ」これは、父親が何度となく繰りかえしていた返事であった。しかも、自分の国について考えなければならない状況に追いこまれても、必ず同じ返事をしていた。彼の世界は、診療所であり病院であって、ほかには、何も関係がなかったのだ。

「キャンプ・デービッド合意」に対する怒りを表明することも、沈黙を守ることもできたが、そんなことは彼には係わりのないことであった。ヘブロンやハルフールの市長たちの裁判を傍聴に行ったりすることで、面倒なことに巻き込まれる必要など、さらさらなかった。当局が、市長たちを留まらせておくか、あるいは追放を決定しても、診療所にやって来る患者たちには直接の影響がない以上、彼には同じことであった。「多分ああいう連中は、時間をもてあましていて、政治のことを話す以外に、楽しみがないのだろう」と彼は考えていた。

彼自身には、時間的余裕などというものはなかった。もちろんそうした連中には、それなりの言い訳があり、彼にも彼なりの言い分があったろう。彼も皆と一緒の考え方をしないからといって、他人が彼をなじることは、当を得ていなかった。

2

その日の朝、診療所に向かう途中で、彼は三日前に治療した、ある患者との面会のことを思い出した。なんとしても、彼はこの約束を守らなければならなかった。患者がやって来た時には、彼が待っている、というのでなければならないのだ。

彼は、今までに、時間に遅れて診療所に到着することはなかった。ただ、朝早く患者の家に往診しなければならなかったりする時や、彼自身が病気のため、いつもより一時間ほど長く起きあがれなかった時は別である。しかし、そういうことは、数えるほどしかなく、まれなことであった。

彼は、診療所のある通りまで、自分の車を運転して行き、そこに駐車した。それから、右からも左からも猛スピードで往き交う車に注意しながら横切るのだった。通りに立ち並ぶ店に目をやると、店のいくつかは、店主がまだ来ておらず、締まっていた。ほかは、ちょうど店を開けているところだった。中を覗くと、箒で掃いたり、埃を払ったり、忙しく動き回る人たちや、その日の仕事始めの簡単な挨拶を交わしている人たちの姿が彼の目に入ってきた。

今日は、民族指導委員会が布告したストライキを、誰もが実行するものと、彼は思っていた。ところが店主たちは、その布告を知らされていないのか、あるいは、単にその布告を無視しているのか、一向にその様子はなかった。

ストライキに対する占領当局の罰則は厳しいものであった。ある食料品店を、当局は二カ月間も閉鎖させたことがあるが、誰も驚きはしなかった。事実、皆は、自分の店が閉鎖されるのには、慣れっこにさえなっていた。実に厳しい懲罰ではあったのだが……。

彼の場合は医者であるので、診療所を閉じる必要など全くなかった。誰も、ストに参加せよと強制はしなかった。自分の仕事が皆に役に立っているのだという事実以外に、彼の特別の立場を正当化する理由があっただろうか。

待合室には、苦痛をこらえている老女がおり、そばには、鼻の腫れ上がった若い男が腰かけていた。戸口には、八歳の子供を抱いた婦人がいた。この人々が、殺到してくる患者たちの一番乗りであった。サイード医師は、自信に満ちて、にっこり微笑んだ。彼が診療所に来てみて、そこに人がきていないことは一度もなかったのである。

彼の専門は耳鼻科と咽喉科だというのに、このあたりで、病気にかかった人間なら誰でも、彼の診療所にやってきた。

彼が、待合室にいる人々に、朝の挨拶の言葉をかけると、若い男が丁寧に挨拶を返した。続いて、女たちも同じように挨拶をした。

3

時は、ほぼ正午になりかけていた。患者は一人残らず帰ってしまったが、定期検診のために、母親に連れられて来た少女が一人だけ

残っていた。彼は、その少女を待たせておいて、看護婦がカップにいれてくれたネスカフェを飲んだ。それから、煙草の紙を自分で巻いて、それを深々と吸った。どうしたわけか疲労を感じていた。

突然、待合室で騒がしい気配を感じた。一体何が起こったのか、注意深く聞きとろうとした。幾人かの異なった声が混じり合っていたが、声の口調は優しげであった。そこに入って来たばかりの男たちが、幼い少女を連れた母親に、話しかけていた。そのうちのひとりが「ドアをノックしよう。緊急なんだから」と言った。

サイード医師が戸を開けると、恐るべき光景が飛びこんできた。ふたりの連れに付き添われた青年は、友人の手を借りて立ち、頭に傷を負っていた。血が二條の滴となって、眼の中に流れ落ちていた。

「どうかしたんですか」

「友だちを診てほしいのです。お願いです！　すぐに手当ててください！」

「どうしてこんなことになったのかね」

「デモの途中で、兵隊になぐられたのです」

「そういうことなら私が手当てするわけにはいかないね。報告もしないで手当てし、それが発覚でもしたら、彼らの法律に従って、罰せられることになってしまうんだからね」

「それは、同胞と祖国への務めを果たさないでいるあなたの口実ですか。少しもあなたに迷惑のかかる仕事でもないでしょう。一体あなたがこの人を手当てしたことなどどうやって奴らに知れるというのですか」と、傷を負った仲間をかかえていた青年が言った。

「すまないが、どこか総合病院に連れて行ってくれたまえ」

背が高く、切れ長の目の別の青年が、それに対して言った。「私たちも、本当に残念に思います。あんたのような人たちの所有している土地の没収に、おれたちが反対して闘っているのだと思うと、情けなくなる。言わせてもらいますが、おれたちは、一寸の土地も、持っていないのです。それでも、あなた方のような、自分の土地を持ってる人々を守ろうとしているのですよ。私たちの共通の課題は、何も持たない私たちのような人間と、自分の家や建て物を持つ人たちと一緒になって、一致して行動をとることです。あなたのように教育を受け、教養も豊かな医者が、こんな素朴な真実について無知だということが、私たちには、とても残念なのです」

若者たちを、腹立たしげに睨みつけた医者のサイードは、自分が口癖にしていた言葉をあえて繰りかえした。

「あんた方のデモのおかげで、私たちが解放されたとでも言うのかね。占領は消滅したとでも言うのかね」

そう言うと医者は、彼らに背を向け、診察室の中に戻っていった。はた目にもはっきり神経が高ぶっていた彼は、あらためて煙草に火をつけ直し、残っていたコーヒーを、ごくごくと飲みほした。

自分以外の問題で、私が悩まなくてはならないようなことを、誰にもさせまい。こうした行動こそが、私の慣れ親しんでいる平和な暮らしを邪魔するものなのだ。他人の言うことなど、自分には興味はないのだ……。彼は、こう自分に言いきかせていた。

## 4

学生のデモは、翌日も続けられていた。息子の学校でも、生徒たちが土地没収に対する抗議デモに参加することに踏み切った。当日の午前中の授業がないと分かると、あるグループは学校を出ていった。イッサムも、そのひとりだった。

イッサムは、自分の家の近くに来た時、ひとりのパトロール隊員に呼び止められた。

「おまえは学生か」

「そうです」

「じゃ、なぜ、学校をぬけだしてきたのかね」

「きょうは、授業がないんです」

「おまえ、デモに加わっていたんじゃないのか」

パトロール隊のひとりが、イッサムに歩み寄り、目の前に立ちはだかると、いきなり顔を殴りつけた。イッサムはふらっとよろつき、そのまま、地面に倒れ伏した。その時、彼は鋭く尖った石に額をぶつけた。その瞬間、世界が、虹色の画面になった。そして彼は意識を失ってしまった。

やがて気がつくと、自分は病院の怪我人室に入れられていた。イッサムはびっくりした。そばに立って彼を見守っていた男が口を開いて言った。「あゝよかった。ようやく、意識がもどったね。ここの先生が傷口を縫い合わせてくれたから、出血も止まったよ。君はもう家に帰れる。さあ、行こうか」

車は、青年の家の前で停った。イッサムは車を降りて、運転手にお礼の言葉を述べ、それから、彼を待ちかまえている光景を想像し、おどおどしながら家の中に入っていった。

彼の母親は、息子の様子を見て大変に狼狽し、思わず叫び声をあげた。それから、夫のもとへ急いで走って行き、息子の身に何があったかを見に来るようにと告げた。

「おれは、こうなることを、心配していたんだ」と、サイード医師は、興奮して妻に言った。それから、彼は、息子の所へ駆けつけ、厳しい口調で同じ言葉をくりかえした。

「皆と一緒にデモに加わらなくてはならない理由があったとでも言うのか！」

「誓って言うけど、僕は、家に帰ろうとして歩いてただけだよ。どうして、僕の言うことを信じてくれないの。授業がないことをちゃんと確かめてから、学校を出たんだ。校庭に残っていたら、逮捕されちゃうんじゃないか、そうなったら、お父さんに迷惑がかかるんじゃないか。そのことで、お父さんが仕事をやめなければならなくなりはしないかと思うと、恐くてたまらなかったんだ」

父親は、優しい眼差しで、息子を見つめた。

「なるほど。そうすると、誰でもこういう災難に会わないとは限らないのだな。デモに加わろうが、加わらないでいようが」

父親の胸には、前日、診療所での出来事が去来してきた。青年のひとりが、民族の大義について、彼の見識の狭さを思い知らせようとした時のことが……。

「きのう、おまえの横に立っていた男は、実にしっかりした人間だった。名前がわかれば是非とも彼に会って、お礼を言っておくのだがなあ……」

「どうすれば分かるでしょうか。あの人は風のように消えてしまったんでしょう」

「生涯忘れられないような貴重な教訓を与えてくれた彼に、心からお礼を言いたいと思うよ」こう言ってから、父親は息子の額に目を注いだ。縫い合わされた傷口を、弱々しい彼の両手で、いたわりながら。

在日アフロ・アラブの女性を訪ねて

# マルハバ!

マルハバはアラビア語で
「こんにちは」の意味です

**「日本人は特に田舎の人が大好きです」とおっしゃるのは、アフリカの若い国、タンザニアの大使夫人のシキナ・ディリアさん。スワヒリ語を一つ教えていただいた。「ドーグー」は「兄弟」のことです。**

「私たちの行くところ硝煙たえずといった感じですのよ」とエジプト時代に爆撃を受けた話をされるシキナ・ハッサン・ディリアさん。

## ルピーと円を混同してドキッとします

●タンザニア大使夫人　シキナ・ハッサン・ディリアさん

*インタビューアー　浅井久仁臣

――ご主人はたいへんベテランの外交官だとうかがっておりますが、これまでの任地は？

❤まず、エジプトに派遣されました。〔壁の写真をさして〕ほら、あれが私の主人とナセルです。エジプトに四年半いまして、ザイールに二年半、それからインド、そして日本です。

奇妙な事に、私たちの行くところ硝煙たえずといった感じですのよ。

――話題の尽きない地域ばかりですね。

### 日本人は田舎の人が大好きです

❤エジプトにいた時、六七年戦争にあいました。

――爆撃を受けたことも？

❤公邸のすぐ近くに軍事空港がありましたから、たいへんでした。それに私はその時、妊娠六カ月でした。ザイールでは、またまた公邸の近くで、川をはさんでの戦闘です。私は、小さな子供たちを抱えて、気が狂いそうでした。夫は政府に頼んで、インドに転任させてもらいました。

――そうすると、インドに行かれたのは、七一年ですね。ああ、わかりました。次は印・パ戦争ですね。

❤現地に着いて三カ月後ですよ。戦闘地域から遠かったんですが、毎日が、戒厳令です。もういいかげんにしてくれという感じでした。

――いずれにしても、たいへんな経験をされたものですね。

❤よい経験であったことは、まちがいないのです（笑い）。

――日本に落ち着かれてみての印象は？

❤日本人、特に田舎の人たちは大好きです。だから教師を雇って日本語を勉強してみたんですが、とても時間がありません。家に来てもらっても、私が留守か、ゲストがいる状態ですからね。そこで辞書を買いまして、独学で少しわかるようになりました。でも、わかり合えるようになるには、まだまだです。一度などは、郊外へ一家でドライブに行った時に、冷却水が切れて、煙が出てきたんですが、それを見て、男の人が本当によくしてくれたんです。そういう時に、言葉が通じたらなあと、痛感しました。

――日本で生活する上での困難な点は？

❤インドから来ましたので、お金の価値のちがいに慣れるまでに、かなりかかりました。「千円です」と言われる度に、「千ルピー（約二万七千円）」と勘ちがいして、ドキッとしてました。それに物価も高いですね。私の家族は肉が大好きですが、インドだったら、キロ単位で買えたのに、日本では、グラム単位ですものね。

### 末娘が一家の通訳です

――家族構成を、おうかがいしましょう。

❤二十六歳になる長男は、ドバイで働いています。次男はスウェーデンに留学後に来日しまして、約一年日本の自動車産業のリサーチをして現在は、英国の自動車会社のタンザニア支社のナンバー2です。

娘の一人は今、夏休みで来日中ですが、カナダのトロント大学で勉強しています。二十一歳の長女は上智に行ってまして、ここにいます三女は、十六歳で、アメリカン・スクールに通っています。末娘は、十三歳で、ジャパン・インターナショナル・スクールに通っており、学校で日本語を勉強していますから、彼女は一家の通訳といったところです。テレビを見ていて、わからないと彼女に聞くんです。

――在日外交官の多くは、子女に日本語を学ばせる事は、時間の無駄だと考えるようですが……。

❤いえ、確かに任地が移れば、彼女の日本語の力も落ちるでしょうが、国のためにもよい事だと思います。タンザニアを訪れる日本人の通訳はできますしね。任地が変わっても、その地の日本人学校で勉強させていただければ、うれしいですね。

――教育の話が出たところで、お国の教育制度について、話していただけませんか。

❤七歳から義務教育が始まります。わが国では、教育は無料です。形式は、被植民地時代と同じ、英国式です。八年間の義務教育のあとは、テストで選抜されたものに、高等教育の機会が与えられます。

――大学の授業は、スワヒリ語で行なわれますか。

❤英語で行なわれるものも多いのです。留学生もおりますし。

――日本からの留学生もおりますか。

❤日本からの留学生はどうか、わかりませんが、ボランティアは多いですね。また、その多くが契約終了後も、現地残留を希望します。

「日本の皆さんはドーグー（兄弟）として歓迎します」と表情豊かに話されるシキナさん。

応接間の中央にはニエレレ大統領の肖像写真があった。イギリスの支配について話されるディリア夫人の表情は急に厳しくなった。

――長くいれば、その国の良さがわかりますからね。

♥わが国は広大で、人も少ないですし物価も安いでしょう。昨年帰国した時も、キリマンジャロに六十名程の日本人グループがいると聞いて会いに行ったのですが、驚いてしまいました。彼らはまっ黒に日焼けして、とても上手にスワヒリ語を話すので、主人なんか、本当に日本人か、なんて、最初は疑っていました。本当に日本の皆さんも、とけこんで生活していらっしゃるようです。

――欧米などでは、日本製品の氾濫で日本の評判は芳しくありませんが、お国でも、日本のビジネスマンは同様でしょうか。

## 皆さんは ドーグーです

♥まず、おわかりいただきたいのは、タンザニアは若い国です。英国は植民統治を通じて、我々に何も残しませんでした。残ったのは、山積された難題だけです。ですから英国とは（購買力が）ちがいます。日本のビジネスマンたちも、その点は、よく理解されてますから、ノー・プロブレムです。

――お国の産業は？

♥輸出産業としてはスパイス、コーヒー、紅茶、鉱石、ダイヤモンド、金などがあります。しかし、どの産業も充分な設備がありません。日本企業の協力でできた、カシューの工場があります。

――われわれが、お国を訪問した時してはいけない〝タブー〟というものはありますか。

♥別にありません。われわれは至ってオープンですから。スワヒリ語で兄弟のことをドーグーと言いますが、皆さんは、ドーグーとして扱われます。

――アラブ諸国を最初に取材に行く前に、同僚から、人の奥さんを絶対にほめるなと言われましたが、そういうことは？

♥ムスリムの家を訪れたら、アラブ諸国と同様の考え方だと思われた方がよいでしょう。しかし、キリスト教徒であれば、そんなことを気にせずに、子供でも、奥さんでも、ほめて構いません。かえって、喜こばれます（笑い）。

――宗教の比率は？

♥ムスリムが過半数ですが、大統領は、キリスト教徒で、第一副大統領はムスリムです。議員数も半々になっており、議会で宗教を口にすることは、禁じられています。

――両教徒の結婚は多いのですか。

♥よくあります。普通は女性が夫の宗教に改宗します。そのことでのゴタゴタは、ままあるようですが、大問題ではありません。

――日本では、お見合いが古くからの習慣として残っており、写真を交換したりするのですが……。

♥わが国では、血族結婚、特にワン・ブラッド結婚というのがポピュラーです。私もそうです。主人の母と私の母は、姉妹です。私は血族結婚はよいと思いますが、反対する人もいます。両者が知り合いでない時は写真の交換ではなく、男の親が、娘を招待し、その娘さんの姿を男の人が覗き見するとか、娘さんが通学する際に、垣間みたりするのです。

――きょうは、楽しいお話をうかがいました。



# パレスチナ問題を英語で読むための事典

## ⑥ IDENTITY

アレックス・ヘイリー氏の Roots がベストセラーになっていらい，「ルーツ」という言葉が私たちの日常会話でも使われるようになりましたが，パレスチナ人たちも，ルーツを問題にします。祖国の地パレスチナから uproot されたからこそ，祖国に帰還し，父祖の地で営々と築いて来た生活に復帰する――まさに，そこに根を張って生きることが，人間としての名誉と尊厳を保証する必須の条件だからです。

パレスチナの現代詩人として有名な T. ザヤードの詩に The Impossible という作品があります。この詩をもとに，ザイナブ・シャースが美しくも力強く歌う時に，彼女は同じ詩のタイトルを Strike Deep My Roots（「深く根を張れ，わたしの根っこよ」）と変えました。

美術の世界でも，樹木のイメージは，根を切られ異郷の地に投げ出されたパレスチナ人たちが祖国の地への帰還の夢を実現してゆく願望の象徴として，取りあげられます。昨年6月に，ナブルスのシャカー市長の車に，イスラエル当局が時限爆弾を仕掛けて，彼の両足を奪ってしまいましたが，その時も，シャカー市長は roots という言葉を使って，こう宣言したのです。

When you amputate a patriot's leg, his roots go deeper in the earth..... They (Israeli authorities) can cut my legs but not my roots.

学問研究の分野では，この roots が identity という言葉で置きかえられます。もちろん，この用語が一般的に使われるようになったのは精神史的な意味でした。現代人が喪失した自我をとりもどすために，自己の存在証明を求めたわけですが，それが identity でした。帝国主義支配は，identity に与えていた精神史的な概念を変化させ，民族の自覚や帰属意識を表わす言葉にしました。

もちろん，identity が政治学，ことに国際政治学で問題にされるようになった昨今ですから（例えば馬場伸也氏が書かれた『アイデンティティの国際政治学』という本がありますが）パレスチナ人の identity の問題も，やがて日本の学者によって究明されるであろうとの期待をもっても良いのかもしれません。

魂の放浪の旅で祖国喪失者（exile）となることと，パレスチナ人たちにとっての exile が異なるニュアンスをもつように，identity もパレスチナ人たちにとっては，異なった意味づけがなされています。

まず，パレスチナ国民憲章の規定を見てみましょう。

Article 4. The Palestinian identity is a genuine, essential and inherent characteristic; it is transmitted from parents to children. The Zionist occupation and the dispersal of the Palestinian Arab people, through the disasters which befell them, do not make them lost their Palestinian identity and their membership of the Palestinian community, nor do they negate them.

民族の「帰属意識」とか「同一性」を表わす概念であるという点に相異はないのですが，強いられた離散の中で identity を守るための社会的条件があまりに弱いため，その条件を解放運動と一体となる（identify）こと，あるいは，革命に参画することによってしか確立できなかったことをアブドルハミード氏などは述懐しているのです。

この点にも，パレスチナ人たちが置かれてきた特殊な条件という背景の問題が反映していると言えましょう。

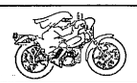
しかしながら，ルーツを切られたパレスチナ人たちのたたかいは，その投げかける意味において特殊な体験ではないのです。なぜなら，roots をとりもどす彼らのたたかいが，今日の時代に生きる私たち日本人の真の identity をも照らし出してくれるからです。

時代に対する identity はまた歴史に対する identity でもあります。アラファト議長があらゆる機会に歴史という見張人を強調するのも，民族が負わされた苦難の中から，時代と歴史の中にパレスチナ人民の identity をしっかりと樹立しなければならないという哲学をもっているからでしょう。アラブの団結をよびかけた最近の演説の中にある，次の一句が注目されます。

We make this appeal, and we declare that our blood is not water; it is the salt of the earth.... At [this meeting we must place all our cards on the table fairly and honestly and without exaggeration. We must give everything possible, for history is watching, and it spares no one.

関場　理一（通訳者）

# イツコのアラビア語講座



## ――その1――　平田伊都子（イラスト，アラビア文字とも）

ざあてお待ちかねのアラビア語講座です。本誌には以前より多くの読者から、アラビア語を勉強したいという声が寄せられていましたが、本誌6月号に文章を書いて頂いた平田伊都子さんが、今月号から素晴しいイラストとレタリングをつけて、アラビア語教室を連載して下さることになったのです。平田さんは大阪生まれの京都工芸繊維大卒。イラストレーター、レポーター、C・Mプランナーとしてテレビ、週刊誌で活躍中です。著書の「アラビア語の初歩の初歩」（南雲堂）は、オール・イラストで、今まで難かしくてアラビア語に手が出なかった多くの人々に歓迎され、ベストセラーになっています。つけ加えますと、彼女は女性ライダーでもあるのです。

ン・びらーでぃ』を手にした瞬間から、あなたはもう既にアラビア語と深く関わり合っているのですから……。

フィラスティン・ビラーディ，サーイカ，ジハード，フェダイーン，・・・この雑誌に頻繁に登場するこれらのアラビア語とは、もうお馴染みになっていらっしゃるでしょう。アラビア文字でどう書くのか、どんな意味を持つ言葉なのか、探ってみたくありませんか？

アラビア語講座の前座の今回は、この4つの言葉（正確には『フィラスティン・ビラーディ』は2つの言葉から出来ているから、5つ）に挑戦してみることにしましょう。

### 〝アッサラーム・アライコム〟

さて、この長い名前の美少年は、レバノンはベイルート郊外の『タルザータル子供の家』で寄宿生活を送る、私イツコ　と読者の方々とのアラビア語の先生なのです。つまりこの頁を開いたあなたは、あなたの意志にかかわりなく、もうレバノンに居るのです。そして、ある時はシャティーラのキャンプで、ある時はベイルートのスークで、ある時はイスラエルの砲弾の下で、私と一緒にアラビア語を勉強していくのです。「今さらアラビア語だなんて」等としりごみしないで下さい。『フィラスティ



4，アラビア・アルファベットは元来、子音表示文字なのです。例えば ب という文字は、実際使われるとき、バ，ビ，ブとなるわけです。どんな時にバになりブになるのかは文法とその言葉自体を知らない限り分らないのです。ただし、外国人のために母音表示記号なるものがあって、これがバ，ビ，ブ，すなわちBⓐ，Bⓘ，Bⓤ，(ア，イ，ウ）の違いを示してくれます。「べ，ボ，つまりBⓔ，Bⓞ，エ，オ，にあたるのはどうなってんだ？」御質問はごもっともながら、ないんです。残念ながら日本語のエ・オに当たる母音は使いません。何故と言われても困るのです。これはわれわれの意志にかかわりあいのない事なんです。それゆえ、Tokyoはアラビア語で、Tukyuと、ウの音で代用します。発音のこと、アルファベットの詳しい使い方は次回をお楽しみに・・・・。

### ５つの言葉

お待たせしました。今講座のメイン・イヴェント、５つの言葉。右からですゾ、お忘れなく。最初は言葉として続けて、それからひとつひとつ切り離して書きました。

فلسطين　(パレスチナ)　フィラスティン

ن ي ط س ل ف
ン　ィ　テ　ス　ラ　フ

بلادي　(我が祖国)　ビラーディ

ي د ا ل ب
ィ　デ　ー　ラ　ビ

صاعقة　(稲妻)　サーイカ

ص ا ع ق ة
カ　イ　ー　サ

جهاد　(聖戦)　ジハード

د ا ه ج
ド　ー　ハ　ジ

فدائيون　(犠牲的戦士)　フェダイーン

ن و ي ء ا د ف
ン　ー　ィ　　ダ　ェフ

理屈ぬきに覚えてしまって下さい。

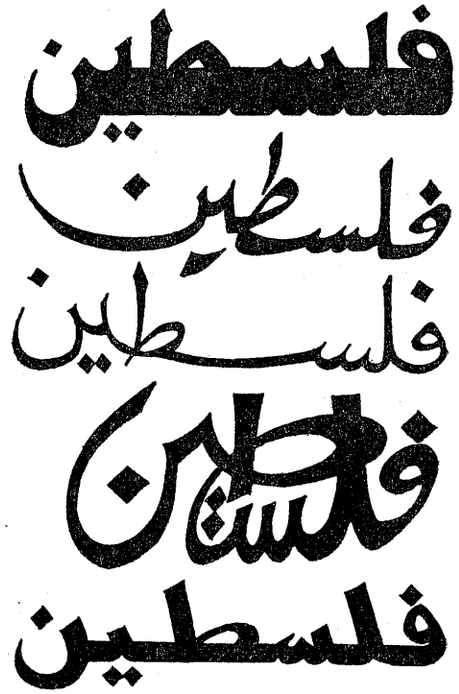
### 「これだけは知っておこう」

その前座の前座「これだけは知っておこう」なる予備知識をまず列挙しておきます。

1，アラビア語は28のアラビア・アルファベットから成っています。『大きな声で、書いて慣れろ！』。初めて小学校で仮名を習った時、われわれの意志にかかわりなく「あ、い、う・・・・」と唱えながらノートのマスを埋めさせられたのを覚えていますか？　あの要領です、摩訶不思議なアラビア紋様を自分の物にしていくのは・・・・。

2，アラビア語は右から左へ書いてゆきます。アラビア・アルファベットが集まって言葉を作る時、続けるのでいささか形が変化します。が、基本は同じだから『案ずるより見て慣れろ！』、意味が分らなくても良いから、アラビア語の文を数多く見ることです。（ただ次の字に続けない文字もあります。次号で詳しく説明します）だからふりカタカナも右から左へ書いてゆきますから注意して下さい。

3，文字の書き方にルールはありません。以下は全部『パレスティナ』(フィラスティン）と書いてあります。お好きな書体でどうぞ。



# 原子炉爆撃ショック

## イスラエル　西側に不利益

イスラエルによるイラク原子炉爆撃は、すでに緊迫の度を強めていたレバノン情勢とあいまって、中東の緊張を著しく強めるだろう。当面、アメリカとサウジアラビアの関係悪化は避けられまいが、もう少し長期的にみると、この混乱はアメリカなど西側の利益を損ない、ソ連の久方ぶりの得点を招くものとも、予測されている。

いまの時期に緊張が再燃した最大の理由は、今月三十日に、イスラエルが総選挙を予定していることである。一時、劣勢を伝えられたベギン首相は、レバノン危機やイラク原子炉爆撃など、国民に人気のある強硬政策を取った結果、いまや優位に立ったと伝えられる。緊張再燃で、イスラエルのベギン政権とソ連が利益を得るという奇妙な情勢にあるわけだ。

レバノンの混乱は、シリアがレバノン領内に地対空ミサイルを配備したために「ミサイル危機」とも呼ばれてきたが、これらのミサイルはイスラエルに直接の脅威を与えるものではない。イスラエルがねらう〝本能寺〟は、この混乱に乗じて、レバノン左派、パレスチナ解放機構（PLO）をたたき、穏健右派勢力によるレバノン支配を確立することにあろう。

これをソ連からみると、イスラエルの圧力を受けるレバノン左派、PLOシリアなどに影響力を拡大する好機である。ソ連は中東の全面戦争は好まないが、レバノンのような限定された地域で、統制可能な緊張を高めて、利益をあげようともくろんでいるようだ。ソ連の利益は、そのまま、アメリカおよび、アメリカの中東政策に追従する一部西側諸国の不利益につながる。たとえば次のような点が指摘されよう。

一、アメリカのイスラエル支援に反発し、サウジなど穏健なアラブ諸国がアメリカから離反、アメリカの求める基地提供要請などにますます応じにくくなる。

一、ソ連はレバノンのキリスト教勢力との関係改善に動いているが、もしシリアがミサイルを撤去せずに通せば、シリアの威信が高まり、キリスト教勢力もシリアに傾く。その結果、ソ連軍がレバノン駐留やレバノン港の使用を求めてくることもありうる。

一、ソ連の支援するシリアのアサド政権の国内的立場が強まり、アラブ世界での孤立を脱する。

一、危機の最中に、ベギン・イスラエル首相と会談したサダト・エジプト大統領のアラブ世界での孤立は続き、キャンプ・デービッド合意に基づく中東和平の進展は望み薄となる。

イスラエルのイラク原子炉爆撃は、こうした情勢の流れをさらに促進するだろう。新たな混乱と危機の要素は、イスラエル空軍によるサウジ領空侵犯、サウジ上空で米軍が操作する早期空中警戒管制機（AWACS）の役割、イラクの報復心――の三つと思われる。

米政府は「AWACSでイスラエル機のイラク侵入を探知できなかった」と弁明しているが、アラブ世界ではこれを信用せず、米・イスラエル共謀説も出てきそうだ。

イラクがイスラエルにどう報復するかわからないが新しい混乱に乗じてイスラエルがレバノンのPLOの拠点を全面的にたたくようだと、中東全域に油田破壊を含む広範なテロが広まるかもしれない。

サウジ王制は、アメリカ離れに動き、その結果、アメリカからのAWACS供与も遠のく。こうして、アメリカと穏健アラブ諸国の安保関係構築の努力は中断ないし停滞する。

「サウジ王制が来月倒れる危険もあるのだ」と、ワシントンで湾岸安保問題を分析している専門家筋は緊張した評論を加えている。

――「読売新聞」6月10日〈今日の断面〉「原子炉爆撃ショック、西側に不利益　イスラエル」（ワシントン・浅井信雄特派員）より（全文）

### コラムの眼

原爆を見舞われてからでは後の祭り、背に腹は代えられぬとばかりイスラエル空軍のイラク原子炉爆撃。友好国エジプトからすら「無責任な正当化できない犯罪」ときめつけられようと「生きた犬は死んだライオンにまさる」（旧約聖書）か。

旧約「伝道の書」のその前の部分はこうだ。「人間の心は悪に満ち、生きている限り人々の心には狂気が潜んでいる。そして、旅路の果ては冥土（めいど）だ」――「毎日新聞」（6月9日夕刊）「近事片々」より

それなりに理路整然なれど、説得力皆無の暴力行使。イスラエルのハネあがりに世界呆然。

抑止でなく挑発として働く核拡散。このままではキノコ雲に包まれ、宇宙船地球号の消滅。

――「朝日新聞」（6月9日夕刊）「素粒子」より

## 逆立ちした論理

原子炉を爆撃するとは、何と無謀なことをしたものだろう。放射能汚染が起こったら、と思っただけで身の毛がよだつ。当のイスラエルによれば、人道的、平和的行為だそうで、その逆立ちした論理にもゾッとする▲先の日曜日は聖霊降臨祭に当たる。原子炉で働く百人あまりのフランス人技術者は安





息日で現場にいないはず。だから、わざわざこの日を選んで爆撃した、とイスラエル政府はいう。人道的立場から日どりを決めたというわけだ▲放置すれば七月か九月には稼働する。その後に爆撃すれば、放射能でバグダッドの多数の市民が被害を受ける。といって傍観していれば、原子炉で製造される原爆がイスラエルの都市の上に落とされるだろう。平和と福祉のために、あえていま爆撃したと声明は強調する▼原子炉爆撃という危険で野蛮な行為が、こんな崇高な人道的、平和的精神の発露とは知らなかった。原子炉がイラクへ船積みされる寸前、南仏の倉庫でその機材が爆破されたのも、イラクの原子物理学者がパリで暗殺されたのも、きっとイスラエルの人道的、平和的行為だったに違いない▲バグダッドはすんでのところで中東の広島になるところだった。その広島に原爆を投下することを勧告したスチムソン米陸軍長官は当時「これで失う人命より何倍という米日両国の人命を救うことになる」と述べた。論理の逆立ちは、いまにはじまったことではない▲中東の平和のためにフランスの輸出した原子炉が、中東の平和のために米国の輸出した戦闘爆撃機で破壊された。「平和のため」という飾り文句は完全武装している時があるから警戒を要する。古来「平和のため」に人は戦争をはじめた。

――「毎日新聞」6月10日〈余録〉より（全文）

# 歯切れ悪い中東政策

## 石油確保と対米追随の板ばさみ

中東外交の比重は四十八年の第一次石油ショック以後大幅に増したが、それも対米、対欧、対アジアに比べれば決して大きいとはいえない。この一年間の中東政策をみても、日米首脳会談での言及、対イラン経済制裁措置、イラン石化計画などが中心。これからのことにしても八月に園田外相の歴訪が予定されているぐらい。

こうした中で日本・パレスチナ議員連盟（会長・木村俊夫元外相）によるパレスチナ解放機構（PLO）のアラファト議長招待はなかなか実現せずゆれを見せている。中東外交の展開を具体的にはかって行こうと鈴木首相が歓迎の意向と会談の用意を表明し「六月訪日」が期待されたが、秋に延期となったのである。理由は明らかでないが中東問題に対する日本の微妙な立場と苦悩を端的に反映したものといえる。

こんなわけで今回のイラクの原子炉爆撃について、明白なイスラエルの「暴挙」としていち早く非難したにしても、本格的な対応は関係当事国、アラブ世界の出方に加え、米国がどういう政策を打ち出すかを見なければ、ということになりそうだ。

### アラブの不満

中東外交の歯切れの悪さは、わが国が石油供給の大半を中東諸国に依存している実情と「西側陣営の一員」としてとくに米国の中東政策との足並みを常に配慮しなければならないという立場が、作用している。

たとえば今回、イスラエルの行動を、外相談話の形で非難したが、そのねらいについて外務省は「抗議というのではなく、今後もイスラエルとは対話を続ける立場から自制をうながしたもの」というのだ。石油確保の面からアラブ寄りの姿勢をとっているわが国の外交だが、同時に、親イスラエル寄りの米国の立場がまだいまひとつはっきりしないことにも、気を配っておくということであろう。

事実、米政府はイスラエルの行動を国際法違反などの観点から非難し、F16戦闘機の引き渡し停止検討などの動きを示しつつ、イスラエル支持の基本政策は変えない構えも見せている。今後、安保理での協議が予想されるが、米国の中東政策にも同調を示さざるを得ないわが国の行動が迫力を欠くのは否めまい。

アラブ諸国側にしてみれば、十日の在京大使団の高島外務事務次官への申し入れのように「イスラエルが一方的に悪いのに関係国に平等の自制を求める日本の姿勢はおかしい」という不満となってハネ返るのは当然だ。

もっとも、中東外交で独自の道を模索しようとする動きもないわけではない。PLO問題では米国や西欧諸国に先んじてパレスチナ人の正当な権利を認め、イスラエルとアラブ諸国双方と対話を進めて中東和平を実現しようと、伊東外相の訪米などを通じて米国にも働きかけている。国際的な責任分担が問われる中で何とか役割を果たしたいという表れだが、同時に現在の国際情勢は米ソを軸とする東西関係や南北問題だけでは割り切れず、中東それ自体が選択を求めている。

これに対し中東諸国は、かつての宗主国だった欧米諸国と違った親近感を日本に持ち、「対米追随」ではない独自の対応を期待していることは間違いない。

しかし、現実には今回の原子炉爆撃という衝撃的な事態になると、独自性を貫くことが難しいのはすでに見てきた通り。その場、その場の対応に追いまくられることになりそうだ。

こうした現状に対し「米国の努力に褌益（ひえき）とだけいっていれば石油が確保できるわけではない。米国がイスラエルにどういう措置をとるかで、アラブ産油国の政策がゆれる可能性は十分ある。わが国独自の中東政策を確立するとき」という声も、外務省内では聞こえるのだが……。

――「朝日新聞」6月11日「歯切れ悪い中東政策」より（抜粋）

**◆訂正**　前号23頁の「中東戦略で責任分担、日本首脳会談の特徴」は「…日米首脳会談…」の誤植でした。

〈4〉

# エルサレムで出会った人びと

神田誠司

パレスチナ——遠い言葉である。パレスチナと聞いてどれだけの人が、ある程度まとまったイメージを持つことができるだろうか。パレスチナとはどこの地域のことなのか、どのような歴史をもち、何が問題とされているのか。そうした問いに答えられる人がどれだけいるのだろう。

私は先日、街頭で、五月十五日のパレスチナ・デーに因んでパレスチナ問題を考えてみて下さいという趣旨のビラを配った。夕暮れの駅前の雑踏を構成する、様々な人たち。買い物帰りの主婦、家路を急ぐサラリーマン、友人とおしゃべりしながら通り過ぎていく女子学生。しかしその様々な人たちは、私たちが手渡したビラを見ると、みな一様に、同じような表情を見せた。その表情からは「パレスチナって何だったかしら」という当惑がうかがえた。そしてビラを配りおえて、駅のゴミ箱に捨てられたビラを見たとき、私は虚しさがこみ上げてくるのをどうしようもなかった。そしてあらためて、パレスチナが、まだまだ遠い言葉であることを思わざるをえなかった。

しかし私も二年前までは、パレスチナと聞いても何のことか分からず、興味もなかった。そんな私とパレスチナとの出会いは、二年前に三ヵ月ほどイスラエルを旅行した時のことである。私がイスラエルへ行きたいと思うようになったのは、大学の先輩からキブツのことを聞いたときからである。キブツとは、イスラエルにある共産主義的な集団農場のことであり、食事、教育、衣類、住宅……ことごとくが公有で私財の所有をほとんど許さない共同体である。私は、外国人も研修生やボランティアとして生活できることを知り、ただ、キブツに対する興味からイスラエルに向かった。

## 爆撃をうけたキブツ

テルアビブにあるキブツ・オフィスで紹介されたキブツ・エイロンは、イスラエルの北部、南レバノンとの国境から五キロほどに位置する人口六百人ほどのキブツだった。そこで私は、ピーナッツ畑や養鶏場を手伝いながら、次第にキブツでの生活に慣れていった。

しかし、キブツに来てから一カ月半ほどたったある日、私の滞在していたキブツは、南レバノンのゲリラからの爆撃をうけたのである。その日も私は昼までに仕事が終わり、静かな夕暮れを、アメリカ人のボランティアを相手に、チェスをしていた。すると突然、花火を打ち上げた時のような高い金属音が聞こえたかと思うと次の瞬間、耳をつんざく爆発音が静けさを破り、天井から吊り下げてある部屋の裸電球が大きく揺れた。私には何が起こったのか事態が呑みこめなかったが、少し遅れて、空襲を報せるサイレンが響きわたった。私たちが急いで、ころがるように部屋をとび出してみると、そこにはもう地下シェルターに逃げこむ人の波が出来ていた。私も急いでシェルターへの階段を駆け下りた。すでに五十人近い人たちが避難しており、続々と逃げこんで来た。彼らは、もう慣れているのか、ざわめきの中にも無秩序な混乱はない。あわてふためいているのは、私たちボランティアだけである。

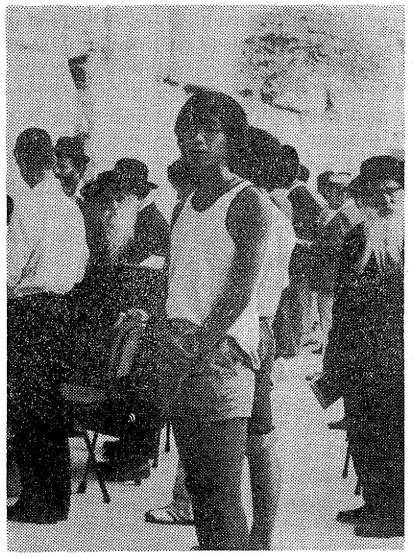
少しして兵士が情況を説明に来た。キブツ内に三発落ちた内の一発は、私の部屋から五十メートルの所におちたとのことである。まだ若い兵士の持つ自動小銃がこの時ほど、冷たく生々しく感じられた時はなかった。間もなくイスラエル空軍のファントム戦闘機が、南レバノンに向かった。次第に爆撃の音は遠のき、それに代わってファントムによる報復がはじまった。警報が解除され、地上に出てみると、南レバノンとの国境を画する山の向こうの空は、オレンジ色に染まり、もうもうと煙が上がっている。一やられたら十やり返すといわれるイスラエル空軍の、徹底的なゲリラへの報復爆撃がくりひろげられていた。それは未明まで続いていた。

## ナチスの烙印

この事件は、イスラエルという紛争の地に生活しながら、そうしたことから目をそむけていた私にとって、画期的な出来事だった。私にとってはイスラエルとアラブとの対立は、それまで観念的なものでしかなかった。それが今度のことで「怖れ」として私に迫ってきた。それからの私は、キブツの人たちがイスラエルに来る前に住んでいたはずの人たちのことをどう思っているのか、そして何故ユダヤ人であるあなたたちは、今こうしてここに住んでいるのか、とキブツの人たちにことあるごとに尋ねてまわった。

ナチスの手によって収容所で腕に烙印をおされた、ポーランドから移住してきた老婦人は、そのひきつりを私に見せながら、アウシュヴィッツを、そしてナチスの惨酷さ、狂気を私に語ってくれた。そしてある者は、国を創っていく苦しさと、戦争を乗り越えてきたことを誇らかに口にした。

しかし、私は話を聞き進むにつれて、もどかしさを感じていく自分に気ずいた。彼らの口から出る話は、驚くほど同じ調子のものだった。それはほとんどが旧約聖書から始まって、ユダヤ民族の虐待と、弾圧の歴史を話すことに尽きた。しかし、あなた方が来る前にもアラブ人たちが住んでいたでしょう」という私の問いも「ここは私たちの土地なんです」という言葉で一蹴されてしまう。それ以上聞こうとすると、彼らは一様にいい顔はしなかった。私も深く聞くことをためらった。そうして、疑問に満足な答えを得ることもできないまま、私の二カ月間のキブツ生活は終わり、私は一カ月間のイスラエル各地の旅に出た。



**神田　誠司**（かんだ・せいじ）
愛媛県出身。一昨年1979年4月から昨年1980年2月までの10ヶ月間，ヨーロッパ・北アフリカ・中近東・アジアなど23ヶ国を旅行。
帰国後，大学で国際政治学を専攻。卒論として「カンボジア難民」に取り組み中。現在，広島大学法学部4年在学中。趣味は，登山・旅行など。
写真はエルサレムの嘆きの壁の前に立つ筆者。

## パレスチナ人との出会い

エルサレムの北東、ヨルダン川西岸の砂漠地帯の真中に、ジェリコの街はあった。この町は聖書の中で悪魔が「お前が本当に神の子なら、ここから飛び下りてみろ」とイエスを誘惑したという話で有名な切りたった崖があることで、キリスト教の聖地でもあり、その絶壁の中ほどにある教会を訪れるキリスト教徒たちも多い。私も町外れのこの教会へ足を延ばした。といっても私は別にキリスト教徒でもなく、聖地巡りに興味があるわけでもない。その崖下にひろがる、かつての難民キャンプ跡を見るためだった。イスラエルによって家を失い土地を追われて、一九六七年の第三次中東戦争によって再びここを追われるまで、難民たちが暮らしたキャンプも、今は土壁が剝げ落ち、荒れ果て、ゴーストタウンとなって、もう人間の臭いはなかった。有刺鉄線によって幾重にも囲まれた、かつての難民キャンプは、現代の遺跡とでもいうべきものだった。ここに逃げ、そしてここをも追われ今も難民として生きているであろう彼らは、今どこでどのように暮らしているのだろうか。そんなことを考えている私の横を、アメリカ人の聖地巡礼の賑やかな団体が通り過ぎていった。

そして私は、旅の最後をエルサレムで過ごした。私はそこで、一人のパレスチナ・アラブ青年と知りあった。彼はみやげ物屋で働きながら大

学を目ざしている、十七歳の青年である。切長の目が印象的な、なかなかの好男子だ。禅に興味があり、私などより良く知っている彼と話している内に、彼が突然「ユダヤ人は好きか」と私に尋ねた。彼がパレスチナ人であり返答に窮したが、キブツで世話になり、よくしてくれた人たちの顔が、私の頭の中に次々と浮かんだ。「好きだよ」。私の言葉に彼の長いまつ毛は、彼の大きな眼に翳を落とした。「僕の兄はユダヤ人に殺されたんだ」。私は言葉を失った。

## イスラエルの烙印

次の日も彼と会った。その日は、彼は一人の友人を連れて来た。彼らに案内されて、エルサレムを一日かかって観て歩いた。歩き疲れて三人で茶店で紅茶を飲んでいる時、私は友人のシャツの半袖から、腕に火傷の跡のようなものが見え隠れすることに気がついた。私は彼に尋ねてみた。「どうしたの、その傷」。彼は私の問いには答えず、袖をまくってみせた。そこには烙印がしるされていた。

エルサレムに住むパレスチナ人たちは皆、身分証明書を携帯していなければならない。警官や兵士の求めに応じて彼らは、それを提示しなければならないことになっている。その点では彼らは外国人がパスポートを持つことと何ら変わらない。つまり彼らは、イスラエルに住みながら、真の意味での国民ではない。土地を追われ、イスラエル国外で不安定な生活を送るパレスチナ人だけが難民なのではない。イスラエルの中にとどまり、どこの国民となることもできず、差別と管理の下で生きているパレスチナ人たちもまた難民であることを、私は彼らの話によって知らされた。

話を戻そう。彼は父祖からの自分たちの土地を自由に歩けないのはおかしいと思ったその日から、身分証明書を持つことを、拒否した。何度か注意され、勧告を受けたが、彼は頑に拒みつづけた。そして、遂に鑑別所に入れられ、そこで生涯消えることはないであろう烙印を焼きつけられたのだと、彼は語ってくれた。

その口調からは憤りも嘆きも悲しみの感情も感じられなかった。ただ淡々と話した。十七歳にすぎない彼が、そうした自分の異常な体験を、ただ淡々と私に、他者に向けて話すことができるということ自体が、私には驚きだった。彼らの置かれた状況というものを考えざるを得なかった。

## アウシュビッツは何だったか?

――皮膚を焼き、醜いひきつりを呈している烙印――私は彼の話を聞くうちに、イスラエルで見たもうひとつの烙印のことを思い出そうとしていた。それが、キブツで私にアウシュヴィッツの狂気とナチスの残虐を語り聞かせてくれた、ポーランド系ユダヤ人の老婦人の烙印であることに気がついたとき、私は暗然として言葉を失った。彼らユダヤ人にとってアウシュヴィッツは何だったのか、歴史の教訓とは何だったのか、人類の英知とは何だったのだ。被害者が加害者へという悲しい逆転。人間性を、人間の偉大さを否定した「歴史は繰り返す」という言葉。私の心の中では、これらのことどもが何に対するものなのか、怒りとも悲しみともつかないまま、渾然一体となって渦巻いていた。

これが私とパレスチナとの出会いである。確かにパレスチナとの出会い――イスラエルで体験し、考えたことは、私に多少なりと影響を与えたと言えるだろう。しかしパレスチナの問題は、与えられてそれで終わりになるようなものではないだろう。

私にとっては、パレスチナとの出会いの真の意味は国際政治あるいは問題意識との出会いだったような気がしている。そうした意味では、これからはパレスチナを自分に内在化させていく作業が必要とされるのではないかと思う。自分がどのように関わっていけるかは、まだ皆目わからないが、何をするにしろ「パレスチナの眼」とでもいうようなものを持ちつづけていきたいと思っている。

◇緊急特集のため、「アラファト物語」「PLO駐日代表のニッポン体験」などは休みました。(編集部)





## 見過ごせぬ重要な誤り

白川義員作品集「新約聖書の世界」

制作・行人社　発行・小学館

本書は著名な写真家、白川義員氏の撮影した豪華写真集で、二八〇〇〇円の定価がつけられているが、最近ほとんど同じ内容で普及版が出版された。内容はパレスチナの聖書遺跡の見事なカラー写真であり、この本は全米写真家協会の賞を受けた。

ところでこの本には見過ごすことのできない重要な誤りがある。それはジェリコのパレスチナ人難民キャンプを、こともあろうにユダヤ難民キャンプと紹介している個所である。「聖書の世界」の中に難民キャンプを入れること自体多くの問題をはらんでいるが、それも正しい解説があればそれでいいと思える。しかしパレスチナ人の苦難の場所を、ユダヤ難民の場所と紹介するのは、大きな政治問題である。

問題の個所は次のようになっている。見開きのキャンプの大写真が本文にあり、後に「作品解説鼎談イエスの生涯」として白川氏と新見宏氏（聖書協会総主事）と遠藤周作氏（作家）が登場する。

「〈エリコ〉

**遠藤**　これはユダヤ難民の家ですね。いまはだれも住んでいないでしょう。

**新見**　住んでいません。

**白川**　中から動物が、ぞろぞろ出てきました。

**遠藤**　ほとんどねこか犬でしょう。

**新見**　私が行ったころはまだ国連の高等弁務官が収容している難民がいました。一九六五年でしたがエリコのすぐそばでした。聖書時代と直接の結びつきはないけれど。

**遠藤**　でも、聖書時代の感じはあるわけですね。エリコの町よりもこの写真の方が。だれもいないし、風が吹いていて。」

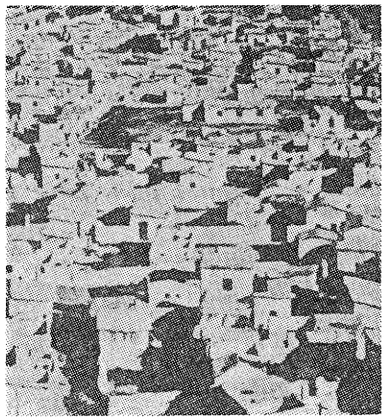
この鼎談に出席された方々には、案内者に「あれはユダヤの難民キャンプです」と教えられたのだろうか。それにしても新見氏がここに行った時は一九六五年と言っているから、この地域（ヨルダン川西岸地区）がまだヨルダン領だった頃である。国連の弁務官というのはパレスチナ難民救済機関（UNRWA）であり、当時ヨルダンにユダヤ難民キャンプがあったなどという事は常識でも考えられないし、またそのような記録も当然ない。

一九四八年にイスラエルが〝建国〟されて、この地域はヨルダン領となり、ナチを逃れたユダヤ人は、キプロス他でキャンプに収容されたことはあっても、パレスチナの地で、しかもヨルダン領内でキャンプに収容されたことは歴史的に明らかだ。ここには一時数万人のパレスチナ難民がいたが、その後、人々はヨルダン川東岸に追放され、無人になっていたのである。

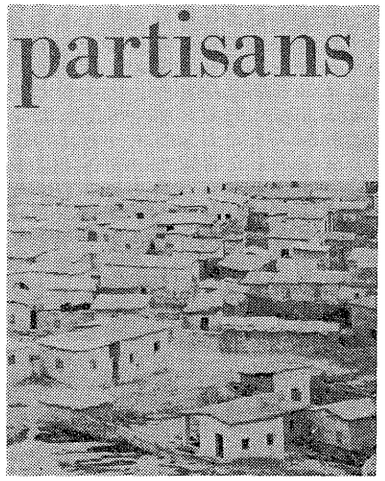
この場所について、一つのエピソードをつけ加えておこう。欧米でヒットしたテレビ連続ドラマに「十戒」があったが、モーゼがエジプトを脱出する前に、ユダヤ人たちが、貧困と圧制に呻吟していた場面の撮影のロケ地が、ここだったのだ。貧しさを表わすためには、パレスチナ人の難民キャンプが適当だと考えたのだろうが、当然これには、欧米の各界からの抗議が殺到した。

さらに念のため、ここにフランスの雑誌（マスペロ社発行、パルティザン、一九七〇年三・四月合併号）が「ジェリコのパレスチナ難民キャンプ」として表紙に用いているものがあるので、紹介しておこう。

（R・H）



白川義員作品集より，問題のジェリコのキャンプ写真。パレスチナ人難民キャンプを，こともあろうに，ユダヤ難民キャンプと紹介している。




フランスの雑誌の表紙で紹介されたジェリコのパレスチナ・キャンプ風景

# バクー油田とロシア革命

■鍵和田 良輔
フォト・ジャーナリスト

パレスチナ略奪物語シリーズ——

## 銀色の亡霊、その足跡⑥

「おい。第一次大戦の前後をほじくりかえそうというのに、お前はバルビュスの『地獄』も知らんのか！」。あるとき大先輩に電話口でこう怒鳴りつけられたことがあった。そこであたふたと岩波文庫を買い求め、ページをめくった。その小説には、動乱のロシアからパリへと亡命した金持ちの一家について描かれている箇所があり、バルビュスは老人に次のように語らせていた。

「わしはバクーが好きだが、あの土地はもう二度と見ることもあるまい。石油井戸の近辺の、あの灰色の果しもない大きな風景。一面の泥、どす黒く、虹色にひかる、石油のぬかるみ。青色の見えない広大な空。わだちの跡がレールのように光っている果しない道。人間たちと同じに黒色にきらめいている建物。石油の匂い。どこもかしこも、花びらまでも、永久に消えることのない地下の海の匂いがする」。バクーとは、どこまでも石油と切っても切れない土地であった。

### ゾロアスターの炎

広大な中央アジア、コーカサスの麓。最大の湖カスピ海に面するバクーはその昔ペルシアに属していた。地表には古来から燃える水が滲み出して、石油はゾロアスター（拝火教）の神聖にして永遠なる炎を燃やしつづけたのである。バクーについてはさらに、一二七二年にここを通ったマルコ・ポーロが記録を残しており、十九世紀中頃に原始的な石油工業が興こされる以前に石油の地として知られていた。しかしバクーは一八〇六年になって南下した帝政ロシアの勢力下に組み込まれた。そして一八七三年以後、埋蔵石油に試掘の手が加えられ急速に開発が進められるようになった。

バクー開拓にはむろん多数のロシア人が群がったわけだが、そこに外国人の姿も混っていた。中でも特筆すべきはルドウィヒ以下のノーベル三兄弟で、これはノーベル賞で有名なアルフレッドを間に置いた兄弟である。一族はもともとスウェーデン人だが、ロシアとの関りはいわば出稼ぎとして渡ってきた父親に端を発していた。その父が機雷の開発や黒色火薬の製造に手を染めていたこともあって、やがてスウェーデンに戻ったアルフレッドがダイナマイトの発明に結びつく。一方、ただ一人ロシアに残った長兄ルドウィヒは、ライフル銃製造に携るかたわら一八七七年にノーベル兄弟石油会社を設立し、一族のバクー進出が開始されたのだった。

井戸を確保した彼らは精油施設、パイプラインなど新技術の導入に力を注いだ。ロシアではじめて、鉄道にタンク車を走らせ、カスピ海にタンカーを就航させたのも彼らである。一八七九年の最初のタンカーには「ゾロアスター号」の名が鮮かに染めぬかれていた。一八九八年ごろ、タンカー船団は五十三隻に及び年産六百万バレルの輸送力を誇って、一族に限らずバクーは文字どおり金の成る木に成長していたことがうかがえる。

そこで一九一三年の産油国統計をとり出してみよう。すでにお分りのとおり、当時のアメリカは二億五千万バレルで断然他を圧倒していた。それに比してルーマニア、オランダ領東インド諸島、ビルマ及びインド（英領）、ポーランド（露）などはいずれも一千万バレル前後の僅かな産出量。次いで第二、第三位に着目すれば、年産六千三百万バレルの帝制ロシアと二千六百万バレルのメキシコが登場する。この結果分ることは、第一次大戦を迎える当時のヨーロッパにおいてバクー油田のウエイトがいかに高かったかということであり、ヨーロッパはバクーに依存していたと語ってもさほど大げさではないということだ。それ故、当時のバクーの繁栄たるや何ともすさまじいものであった。

「金持ちの浪費は、一人が金の板で宮殿を建てれば、もう一人が賭博場を形どった家を建て、三人目がプラチナで貯蔵タンクを建てたりした。彼らはロシアの全アジア地域から大量の美人を輸入し、自分を守るためにコッチスと呼ばれる落ちぶれたグルジァ貴族の軍隊を個人で持っていた」（トゥーゲンハット & ハミルトン、中原伸之訳『オイル』早川書房）。

バクーの特徴は油田が僅か五平方キロの範囲に集中しており十九世紀末に平均日産二百八十バレル（アメリカ四・五）という豊かな油井〝潮吹き〟と異名をとるほどの噴出を見せていた「露国バクーの如きは、一旦噴出するや、天を衝て上昇し滾々として盡くることなき」と一八九七年現地を視察した日本石油会社の内藤久寛は日本での石油開発に希望をつなぐ思いでバクーの様子を報告書に記した。ロシア原油は硫黄分が少く、精製される潤滑油は高品質で、あり余る重油はロシアでの機械利用を促すものだった。灯油は当初、ランプがアメリカ産に合せてつくられていたために、評判を得るには今一歩の感があったが、何よりもその生産コストの安さにおいてアメリカの販売網をしのぐ商品となった。

一八八二年に世界の八五%を生産したアメリカは六年後五三%になり、バクーオイルがヨーロッパ市場にどっとあふれ出した。欧州市場への輸送ルートは、一八八三年カスピ海から黒海への鉄道が敷かれ、バツームからイギリス、オーストリア、さらにはアジアに向けて航路が開かれた。付け加えれば、樽で船積みされていた運搬手段にバラ積みのオイル・タンカーが登場するのもこの黒海地中海ルートからだ。こうして発展を続けるバクーを前にしてさすがのアメリカも焦燥を隠せなくなったのだが、そこには、どう推定してみても三分の一ないし二分の一の生産コストでロシア原油が市場に出回っていたという大きな理由があった。

### 〝天国と地獄〟

その安さとは、他ならぬ労働力の安さでありバクーの労働者たちは乞食同然の生活を強いられていた。「労働者は木造のバラックにつめ込まれ、パンと水しか与えられないこともしばしばあった。貧富の差がこれほど極端であったところは他になく、たぶんロシアにおいてもなかったであろう」（前掲書）。それ故バクーは、ロシア革命においても重要な土地となった。

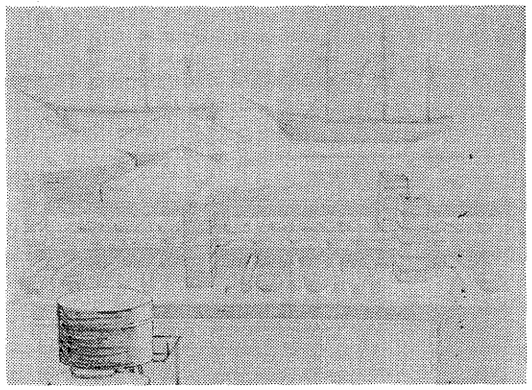
しかし、この問題に触れる前に、長期化する第一次大戦の行方を踏まえておこう。実は、思わぬ長期戦に陥ったドイツにとって、石油不足が深刻さを加えていた。対ルーマニア緊急作戦へと急遽転ずるのもそれが理由だ。一方、ルーデンドルフは密かにスイス亡命中のレーニンに封印列車を仕立て、ロシアの混乱に拍車をかけるべくペテルスブルグへと送りこんだのだ。そして一九一七年十一月ロシア革命成立。この期に乗じてドイツはついにバクーとバツームを結ぶパイプラインに到達する。が、時すでに遅く敗戦。ヨーロッパ戦線は、ロシア革命を生み落として、終結となる。

ついで蛇足だが、ロシア革命で連合国の受けたショックは大きく、日本も含めロシア出兵が行なわれているので、その背景についても一言触れておこう。それは思想の対決もさることながらバクーにはノーベルの他にパリのロスチャイルド家をバックにしたシェル石油など、外国企業が深く進出していたし、帝制ロシアが欧米で発行したシベリア鉄道建設の債券も、莫大な額に昇っていたことがあげられる。従って連合国各国は革命の成立で資金の回収不能に激怒したのだ。そのくせメジャーは一九二〇年代半ばからソ連の石油をこっそり買いつけてもいる。

さて次に、社会主義は働く労働者を主体とした理論だったので、むしろ封建的色彩が強く、遅れた農業国と言った方が適切だったロシアに、どれだけマッチしていたのか問題となるところだ。だがここでも、ボルシェビキの描いた労働運動があてはまる場所があったとしたら、やはりバクーが、その中心地の一つだったに違いあるまい。

バクーからは多くの活動家が育ち、あるいは外部から送りこまれた。根を張った地下活動からバクー・コンミューンが展開された。その中にはベリヤ、ミコヤンといった顔ぶれの他、ゾゴ・ジュガシビリという男もいた。「彼は生粋のコーカサス育ちで、グルジア人の靴職人の息子だ。聖職の勉強を途中で投げ出したがエド・サベイは、この男が地下発行の左翼紙『バクーのプロレタリア』の編集長だったころを記憶している。やがてこの男は捕まって、シベリア送りとなるが、ずっとのちに、別の名前を名乗るようになった——スターリンという名前を。」（R・オコーナー、富岡・三露訳『オイル・ビジネス』サイマル出版会）

さらにロシア革命は、意外な事実を白日のもとにさらけ出した。冬宮の金庫にしまいこまれていた重要書類の一つは、トロッキーの手を通じて、世界に暴露されたのだ。それがサイクス・ピコ条約である。



十九世紀末のバクーのオイル・プラント

（カットも筆者）

# READERS' 読者の声 FORUM

本誌のサロンです。どしどしご意見をおよせ下さい。お待ちしております。
東京都目黒区青葉台1－4－8
PLO駐日代表部「びらーでぃ」
編集部まで

## 大変だった講演会

四月二十四日は、御多忙の中を、広河さんに島原市まできて頂き、厚く御礼申し上げます。

実を申しますと、私は、素人の恐ろしさといいますか、講演会ぐらいすぐやれると思い、無理算段を、おねがいしました。ところが、実際にプランニングしてみますと大変でした。

幸い、私の同僚・友人たる島原地区労、社会党島原支部の御協力により、風雨の中でも四十三名の参加を得ました。

私にとっては大変有難いことでした。また、本誌の読者を完全に三名、予定者を他に一名確保できました。これは望外の喜びでした。

日本平和学会が長崎で開催されましたおりに、諫早の運動家に本誌を広め、できれば講演・交流会をもって頂くようにお願いしました。

島原のPLO交流会は、崇台寺本堂で行ないました。8ミリのあと広河さんの話と、質疑で終りました。参加者の大半が、初めてパレスチナのことを聞いたということでした。

別の会場で、PLOの財政のことを聞き、私どもにもう少し力があれば……と歯軋りする思いです。少しづつ運動を続けていきます。今回は、カンパも四千七百円ほどでした。どれだけの支援になるのかおぼつかないのですが、まず本誌の読者会を五人で始めます。

一つだけ無視しえないことが、その後も起きてます。「あの集会を組織したのが赤軍派だ」と警察が各方面に情報として流しているのです。PLOとしても抗議するなりした方がスッキリすると思うのですが…。

（長崎県　H・T）

## PLOの友を求め

パレスチナ・PLOを支持・支援していく人を一人でも増やしてゆくことを目的として、まずの友人達から「びらーでぃ」の定期購読をする人を、つくってゆきたいと思っています。月々、できる限り多くの人の手に、この「びらーでぃ」を手渡し、その人がPLOの友になれるきっかけをつくってゆく役割を、当面の私の活動の目標にしてます。そうして、将来的にPLOとつながってゆける福岡での組織が生まれるよう頑張ります。

そのために、①毎月「びらーでぃ」を二十冊ずつお送り下さい。代金は、必ず前月に、前金として一万二千円お送りします。②パンフレット、チラシ等お送り下さい（PLOの友キャンペーンの申し込み用紙他）③委託のような形で、こちらで預って販売できる本や機関紙があったら、お送り下さい。④パレスチナの闘いのスライドや映画を紹介して下さい。私も見てみたいし、集会等で利用すれば、多くの人が見れます。⑤PLO駐日代表部の活動等で、私達が福岡にいて参加できることがあれば、やってゆきたく思います。

本日は、一応、五万円を送らせていただきます。

また、福岡での常備店がないので、書店や大学生協に置けるように、あたっています。

ほんの小さな力にしかならないと思いますが、少しずつ進めてゆきたいと思います。

（福岡市　T・Y）

## 対応できぬ悲しさ

情勢が緊迫しているように見えますが、その中でイスラエルのヒットエンドランがちょこちょこ気になりすぎます。「目には目を」の言葉がいいものかどうかは分かりませんが、味方のヘッドが殺られていく中で、それ相応の対応ができないというのは非常に悲しいことです。

「PLOの友」参加費の六月分を送ります。

闘うPLOへ

（横浜市　M・H）

## 共産党の〝反論〟

五月号でパレスチナ問題に関する、日本共産党と民社党の見解に対する批判が提起されていますが、良い企画だと思いました。

日本共産党は、「赤旗」評論特集版第二一五号（六月一日付け）で〝反論〟を行なっています。「戦争」は別の手段をもってする「政治」の継続であるというイロハを「忘れ」て、帝国主義ブルジョアジー、シオニストの侵略、反革命、民族抑圧の「政治」の継続としての、「戦闘」と、パレスチナ人民の反帝民族解放の「政治」の継続としての「戦闘」を同一物として論じる日本共産党の「反論」は笑うべきものです。

「わが日本の民族もアメリカ帝国主義からの独立を歴史的課題としています。パレスチナ人民もしかりです」などと、抑圧民族と被抑圧民族の区別もつけずに「民族自決権」の擁護を一般原則化して主張するところに、この〝前衛党〟のブルジョア民族主義・純粋民主主義への屈服が暴露されています。それにしても、度はずれの無知・無自覚・破廉恥ですね。

（東京都　T・F）

## クラブに入会

益々御清栄のこととお慶び申し上げます。



# ダイヤルログ

Q「お忙しいところ、恐れ入りますが、アラビック・コーヒーの作り方教えていただけませんか」

A「はい。まず、モカとイタリアンのコーヒー豆をものすごく細かく挽いて下さい。パウダー状になる迄。そして同量ずつまぜて、カルダモンを少々、これもパウダー状のものを、まぜます。デミタス・コーヒー・カップくらいの大きさのコップに、作りたい分の水量を、なるべく細長いもので沸かして、お湯がクラクラとならないうちに、ティー・スプーンに一杯半を一カップ分の目安として入れます。好みにより砂糖も少々入れて、よくかきまぜておいて、火にもどして、三・四回、沸騰する寸前に火から離して、よくまぜて、最後はサファーとカップに注ぎます。そして、少し、パウダーが沈むのを待って飲みます」

Q「わかりました。細長い鍋はミルク・パンでもいいでしょうか」

A「結講です。市販の片手の長いミルク・パンがいいようです。コーヒーは、細かい泡がたくさんできる方が、いいですし、各々のカップには、少しづつわけて入れて、おいしく召し上がって下さい」

＊

Q「新聞で、ベルギーの代表の方が、暗殺されたこと読みました。ほんとうにこわいことですね。無防備の人を殺すのですから……、気を付けて下さいね。もちろん日本でそんなことはないと思いますが、変ったことはありませんでしたか」

A「どうも、ご心配をしていただいてありがとうございます。今のところ大丈夫のようです。六月三十日の総選挙のキャンペーンということにしては、あまりもひどいやり方だと思います」

Q「私は何もむつかしい事は、わかりませんが、でも、無意味な殺人は、許せませんので……気をつけて下さい」

A「はい、どうも」

びらーでぃ・クラブの入会申込書を同封します。これで私も晴れて会員になれましたので、今後は各種講演会には、努めて出席したいと思っています。

びらーでぃ・クラブの発展をお祈りすると共に、ハミードさんのゼンソクが一日も早く全快されんことをお祈り致します。

（東京都　H・I）

## 中東問題に関心

先日、朝日新聞にて貴代表部発行の中東・パレスチナ問題の情報誌「フィラスティン・びらーでぃ」の記事を拝見し、かねてより中東問題等について関心があり、ぜひ購読したいと思っていました。

また、中東・パレスチナ問題等に関する書籍類がありましたらお教え下さい。

（神奈川県　S・S）

## ワレサ氏の言葉

「PLOの友」送金体制が確立できて良かったですね。今月分（五千円）を早速、振込ませていただきました。日本人は熱し易くさめ易いとか……、心配してはおりました。初期の人達が基本です。大勢を早くつかんでください。

ポーランドの自主管理労組のワレサ議長が来日し、ちょっとした〝ワレサ旋風〟が吹きまくった感じです。ワレサ氏は「われわれは人間である」「人間は人間に対して兄弟にならなければならない」と、そして「人と人とのつながりを大切にする」という言葉にも同感です。

アラファト議長が一日も早く来日され、それ以上の旋風を巻きおこしてほしいものです。

（埼玉県　H・I）

## 編集室

今から十三年前、テルアビブでユダヤ系の女性友人が、警察に連行された。彼女の手帳に、ディモナ原子力センターのメモがあったというのである。ところがそれは、フランスの週刊誌の写しであった。イスラエルは海外では当り前になっている事でも、国内ではひた隠しにする。後々と話したとき、イスラエルの特殊な情報管理と、国民の集団ヒステリー現象、そして国民ごと自滅に向かわせるシオニズムの問題が指摘された。核に揺れる日本。日本でも同じ事が速度を早めて進行し始めているように見える。七月号はいかがでしょうか。手紙を待ちます。（広）

毎朝、通り過ぎるエジプト大使館の前で、今朝、館員の一人が、「おはようございます」と、微笑みながら挨拶をしてくださった。いつも顔が合っても何ともなく、ただ通り過ぎるだけだったのに…。

今の情況が、彼にそうさせたのか、それとも、私がPLOの職員であるということを忘れたのかな…。

もし、前者の場合だったら、エジプトは、やはり雪どけムードとなりつつあるのかな。日本人スタッフからの方が問題もなく受け入れられると考えたのだろうか。それにしても、日本では、まもなく真夏を迎える。エジプトの雪どけが早まってもいい筈なのだが…。（義）

カナダのオンタリオ州北西部にあるインディアン居留地、グラシー・ナロースに住みついて六年という、写真家の宮松宏至氏は語ってくれた。

差別され、隔離され、文化を破壊され極寒と貧困の中に置かれ、そしてまた水俣病に犯された、グラシー・ナロースの人々と共に暮らすのは「同情」からではなく、差別を知れば知るほど湧いてくる「愛する力」からだと。たしかに「同情」では続かない。が、愛はベターな社会を築き上げてゆく持続的なエネルギー。

カナダの先住民に未来あれ！「勝利の日まで革命」を貫くパレスチナ人に未来あれ！（抄）

某月某日　ガッサン・カナファーニがイスラエルの秘密諜報機関（モサド）によって暗殺された七月八日がめぐってくる。同じようにモサドによって殺された詩人ラシド・フセインの伝記「ラシド・フセインの世界」を読む。ラシドの父の短い弔辞に胸をかきむしられた。死を語ることが、それほどまでに私たちを生へいざなうものなのか。それにしても、いかに多くの素晴らしい魂の持ち主をモサドは奪ったことか。

某月某日　ベギンの重大なカケは例えば日本の真珠湾攻撃などの前例を教訓として計算つくした結果でもあった事実をどう考えたら良いのか――久しぶりの本誌のクラブ例会で板垣雄三先生が指摘された。歴史の審判者の眼には、どう映っているだろうか。それは、亡びのしるしなのか。（関）

# OUR VISION

## イスラエルの戦略

### ファトヒ・アブドルハミード

イスラエルの原子炉爆撃は全世界に衝撃を与えた。この衝撃は、西側諸国に根づよくあったイスラエルに対する同情や寛容な態度を一瞬にして吹きとばしてしまうものであった。〝ユダヤ国家〟として中東世界の中心であるパレスチナに人工的に移殖された国家の本質が、今回の侵略と破壊によって、一挙に国際社会の前にあらわになったのである。

西側諸国がいくら自制を求めても、それを聞く耳を持たない頑な態度は、国際法も道理も彼らの辞書にはないということの証明であろう。ベギンらが弁明した口実によれば、今回の侵略と破壊が〝防衛〟のためであったという。しかし、この主張を完全に容認しないまでも、イスラエルの設立によって犠牲者となってきたパレスチナ人民の悲劇に目を向けようとした人々が少なかったことは驚くべきことである。

この三十年以上にわたって、アラブ諸国を侵略し占領してきたのは、イスラエルの〝国防軍〟であった。パレスチナ人たちを、父祖の地からテロ活動によって追い出すだけで満足せず、いわゆる〝難民キャンプ〟に仮住いしているパレスチナ人たちまで、追跡し爆撃しているのも〝予備的な防衛〟のためである

と言われてきた。そして、遂に、同じ理由によりイラクを侵略し、原子力センターを爆撃したのである。

イスラエルは、自らの安全を守るためとの口実のもとに、たえず防衛を攻撃に変えてきた。アメリカが供与してきた新鋭の兵器と装備は、この転換を際限のないものにしてきたことも事実である。もちろん、この点は、アメリカの政策担当者たちが当初から計算に入れていたところである。イスラエルには、あくまでも、防衛のために使う範囲で武器を援助するのだという説明は、国際世論を欺くためにアメリカが用いてきた二枚舌政策であった。

イスラエル側も、アメリカの二面政策を利用しながら、防衛を攻撃に自在に転換する戦略を追求してきた。今回のイラク原子力研究センターの爆撃は、その一つの頂点であった。だからこそ、ベギンは、国際世論のごうごうたる非難をあびながらも、「イラクが破壊された原子力施設を再建すれば、再び破壊する」と豪語したのである。

レーガン政権も、国際テロを非難しながらも、イスラエルが国家テロを行なうのを許してきた。原子力センターを設立するのみならず、南アフリカ共和国と共同し、原爆を製造し保有することになったイスラエルは、アラブの国が平和利用のために原子力研究センターを持つことを許さないという論理をふりかざすのも、イスラエルがアメリカと西側の同盟諸国から制裁を受けないのみならず、この無法ぶりをアメリカが激励していることを知っているからである。

だからこそ、ベギンは、選挙の直前に用うる最大のカードに賭けたのであった。かつて彼はキャンプ・デービッドに調印したサダトとコンビでノーベル平和賞をもらった。あの賞がディール・ヤシーンをはじめとする大量虐殺の功績に与えられたからと言って、今回の奇襲作戦によって、サダトぬきでもう一度、単独のノーベル賞をもらえるとでも考えていたのだろうか。

ホロコーストの犠牲者であるからとの理由で、パレスチナ人民に対する新たなホロコーストの加害者となり、その三十年以上に及ぶ暴挙が国際社会によって裁かれなかったからといって、いかなる無法ぶりも許されるというものではない。

時代は刻々と変わっている。原爆をたてにジャングルの法則をふりかざすものが、何十年も放置されることはありえない。ベギンの無法ぶりはイスラエルという人工国家の脆弱な主柱をなおいっそう弱める結果を招いた。

**（パレスチナ解放機構駐日代表）**



# VOICE OF PALESTINE

## アラファト議長は語る

### われらの存亡を決する岐路

バグダードでアラブ首脳会議を開催した時に、われわれはキャンプ・デービッド合意を拒否する立場をとった。どうしてもアラブの連帯を守ることが必要であったのだ。何故ならば、エジプトが同協定に調印したあとは、他のアラブ諸国もこれにならうだろうと、アメリカは想定していたからだ。われわれは、この陰謀の進行を阻止する方策を考え出したのだった。あの当時シリアと相異のあった国々も、今日ではシリアを支持しているとクレビ事務総長が言われたが、私も同感だ。これは、好ましいことだ。こうした情況のもとで忘れてはならないのは、われわれにとって、新たな立場と新たな反応が不可欠であるということだ。この緊急会議に参集している今こそ、われわれは、まさに大きな岐路に立っている。ここでいかなる方針を下すかは、われわれの存亡を決するであろう。

われわれアラブ民族は、偉大なことをなし得る。イスラエルが直面している最大の危険は自らの力に対する幻想であると言った人がいるが、私もそう考える。しかも、イスラエルの力なるものは、それ自身のものではなく、輸入されたものであるという指摘にも同感だ。だが、われわれアラブの力は、真の力であり、われわれは、アメリカと対決している。……

——一九八一年五月二十二日、チュニスで開かれた「アラブ連盟緊急会議」での演説より

### われらの流す血は水にあらず

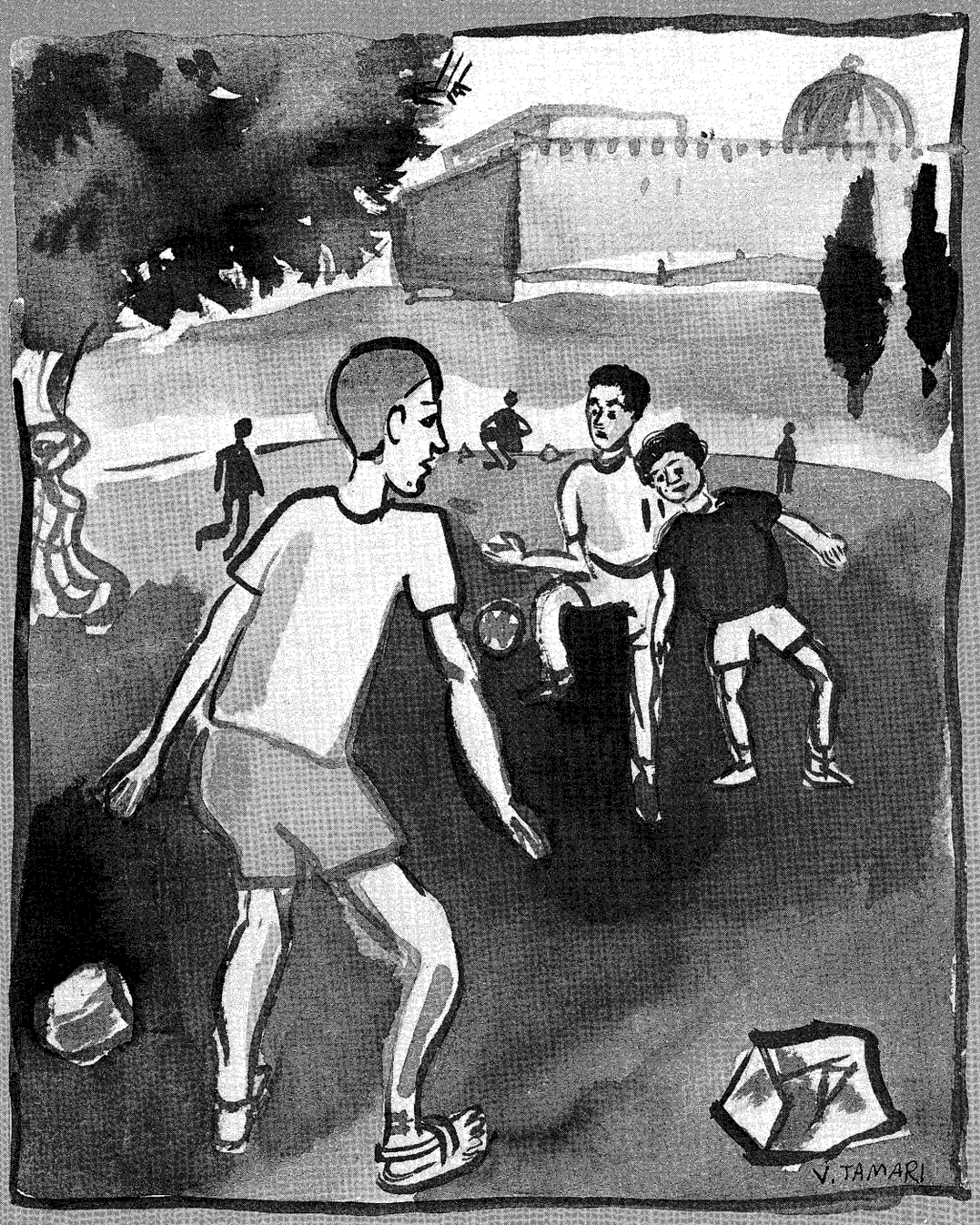
パレスチナ人民は、最後の血の一滴までもふりしぼって、また、イスラエル占領下では、子供たちが占領軍に投げつける最後の石の一つまでも駆使してたたかいつづける。私は、ここで各国首脳に訴えたい。このたたかいを支援するために、そしてパレスチナ革命を絶滅させレバノン・パレスチナ人民を皆殺しにしようとする勢力とたたかうために、更には、両人民を苦しめている破壊と地獄のような情況——それは、いままさにレバノン北部にも拡大されようとしている——に終止符を打つためにも、各国は何が出来るのか、卒直に会議のテーブルに出してほしい。

この緊急のよびかけを行なうにあたり、明らかにしておきたいのは、われわれの流している血は水ではないということである。われわれの流しているのは、人民の赤い血であり、それは、まさに地の塩なのだ。しかも毎日、新たな犠牲者の血が流され、犠牲者の数は、日ごとに加えられている。イスラエルの五十四機のファントムは、一回の爆撃で六五〇トンの爆弾を、更に十一の地点にロケット砲弾を投下し九十五人もの人たちを殺りくし負傷させた。

この会議では、手もちの一切のカードを、誠意をもって、正直に、何の誇張もなく出し合わねばならない。持っている一切のものを出し合うべきである。なぜなら、歴史は証人として、われわれを見守っているからであり、しかも歴史は、一切を見とおしているからである。

——一九八一年五月二十二日、チュニスで開かれた「アラブ連盟緊急会議」での演説より

# パレスチナのこどものあそび —⑧—サッカー




サッカーは、パレスチナでも、ほかのアラブの国々でも、子どもたちに1番人気のあるスポーツです。村の広場や畑のすみを使い、2個の石をゴールの印にします。貧しい子どもたちには、ちゃんとしたサッカー用具などあるはずがありません。どんなゴムボールでもいいのです。サッカー靴の代わりには、テニス靴をはきます。はだしでサッカーする子もいます。

それでも、2つのグループに別れて、互いに競い合うと、それはもう興奮してしまいます。大人たちには、スポーツ・クラブやサッカー・チームがたくさんありますが、子どもたちも子どもたちで、まにあわせのスポーツをするのです。

（絵と文　ウラジミール・タマーリ）

**Interview**

## 新しくPLO執行委員（閣僚）に選ばれた

# マフムウド・アバス氏

«新しくPLO執行委員にファタハ（パレスチナ民族解放運動）を代表して選出されたマフムウド・アバス氏（アブ・マーゼン）は、ファタハの結成に参加した指導者の一人。パレスチナ北部のサファドに生まれ、ダマスカス大学で法律と国際政治学を専攻し、カタールの文部省で活躍された。パレスチナにおいて三つの宗教が共存してゆくための理念を打ち出すために、イスラエル内部の進歩的なダヤ系知識人をはじめ国際的にもユダヤ教徒との対話を発展させてきた指導者でもある。日本パレスチナ友好議員連盟の招きで来日が予定されているので、本誌では、訪日の抱負などもうかがった。

* * *

——執行委員へのご就任おめでとうございます。まずご感想をおきかせ下さい。

**ア氏**　ファタハから、アブ・アンマール（アラファト議長）、アブ・ルトフ（カドウミ政治局長）についで、三人目の代表として内閣にあたる執行委員会に参加することになり、責任と使命の重大さを感じています。担当は、いわば国務大臣に準ずるものになりますが、これまで進めてきたEC諸国との対話はもちろん、社会主義インターや日本など先進工業国との対話を発展させる使命も引きつづき担ってゆかねばと思っています。

——PLO全体が新しい段階に入ったと言われますが、具体的にどう考えるべきなのでしょうか。

**ア氏**　独立国家建設の準備に入ったということです。そのことは、国家樹立にむけて経済基盤を整えるために、新たに経済局を新設したこと、イスラエル占領下のパレスチナ同胞の教育問題を専門とする局を設置したことが、その具体的な措置です。大蔵省にあたるパレスチナ民族基金がありますが、経済局は、これと別です。

臨時政府問題が、そうしたPLOの実体と、現実的な機能を背景に論じられるということ自体は、われわれのたたかいが、独立国家樹立のための最終仕上げに入っていることを証明しています。

——ユダヤ教徒を含む、三つの宗教の共存こそ最も望ましいあり方だという理念を創り出すために貢献されたとうかがっていますが、イスラエル内部の最近の動きについて一言。

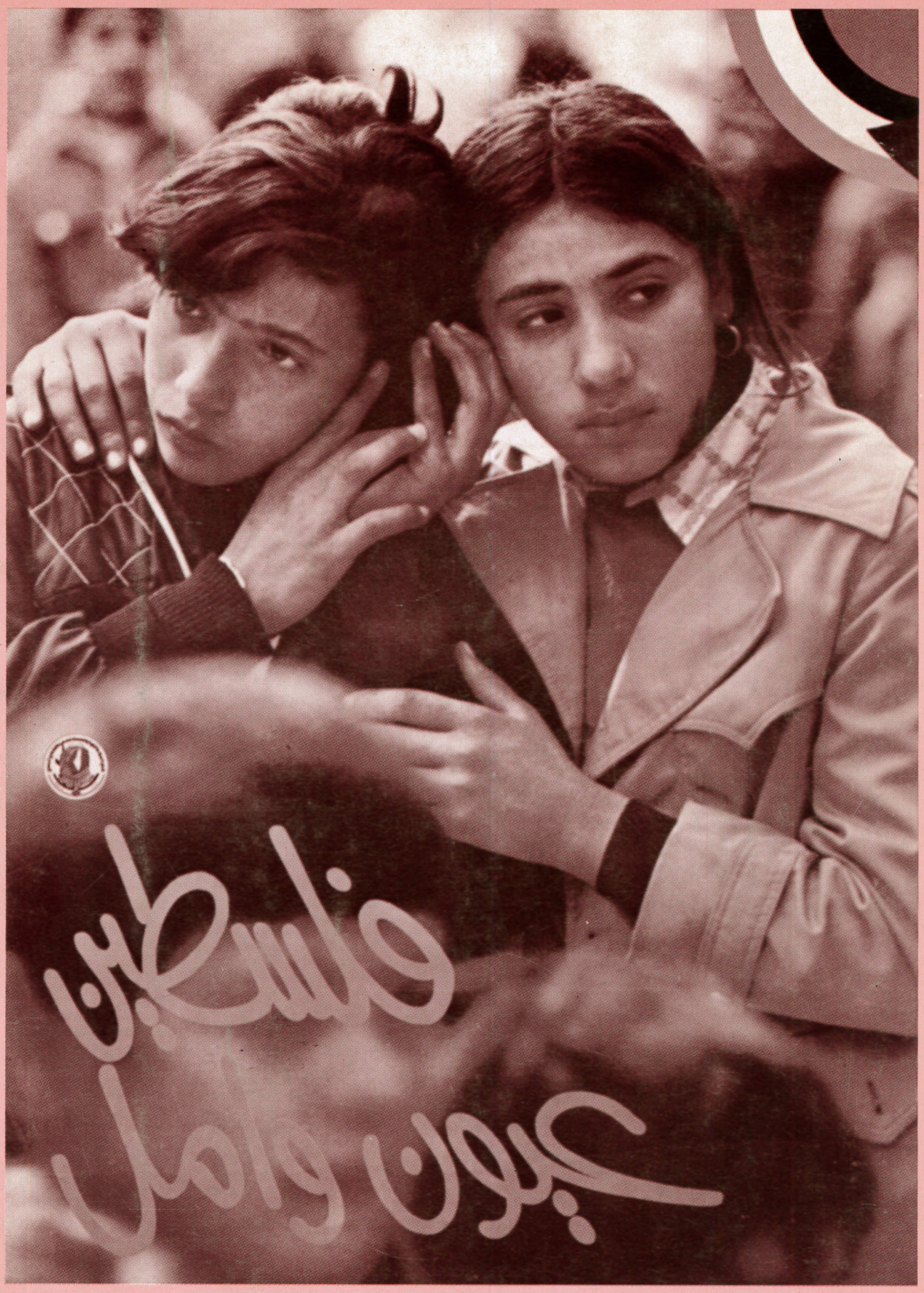
**ア氏**　シオニズムからの解放という課題の実現が最も重要です。そのためにはパレスチナ人もイスラエル市民も相互に認め合わなければならないという受けとめ方がイスラエル内部で強まっていることは注目すべきです。シオニズムの左派を代表すると言われるウリ・アブネリ氏がクネセット（イスラエル国会）でイスラエルとパレスチナの両方の旗を掲げたことは象徴的な出来ごとです。だが、二つの社会が、お互いに承認し合わなければならないという確信が広まっていることは、PLOがイスラエル国家を承認しなければ解決はありえないとするアメリカやシオニストの主張とは全く異なるものなのです。この前のPNC（パレスチナ国民議会）での討議の主要議題の一つが、イスラエル市民との対話をいかに発展させるかでした。これは、イスラエル内部から言えば、パレスチナ人との共存の条件をいかに可能にするかということです。

——日本政府との公式の対話は、アラブ首長国連邦駐在の村田大使との間で、あなたがPLOを代表して開始されたわけですが、それだけに日本への期待も大きいと思いますが…。

**ア氏**　パレスチナ独立国家の樹立に向けて、また樹立後の段階で、日本に良き協力者として、力を借してほしいという期待をもっています。中東問題の解決に対しても、もっと政治的な役割を日本政府に果たしてもらいたいというのも当面の希望です。そのためには、もっとバランスのとれた対応をしてほしいのです。パレスチナ人民の民族的諸権利とPLOの完全承認——これこそが、日本が国際的にも政治的役割を果たすための条件ではないかと考えます。

第二巻・第十号　一九八一年七月二十日発行　毎月二十日発行　一九八〇年一月十九日第三種郵便物認可　年ぎめ購読料七、二〇〇円（法人一四、四〇〇円）一冊六〇〇円、送料とも

## ポスター・ギャラリー③




●これもパレスチナ革命十六周年記念ポスターの一枚です。このポスターを先着十名の方にプレゼントします。郵送料三〇〇円を六〇円切手五枚でお送り下さい。

**フィラスティン・びらーでい 7月号**　1981年7月20日発行
**編集発行人**／ファトヒ・アブドルハミード
**発行所**／PLO駐日代表部
〒153 東京都目黒区青葉台1-4-8 Tel. (03)463-2840
印刷所／株式会社 太平印刷社

**FILASTIN BILADI** JULY 1981 NO. 20
Edited & Published by Fathi Abdul-Hamid, Director
PLO Office, Japan; TELEX: J 27524 FATHI
1-4-8 Aobadai, Meguro-ku, TOKYO, Japan, 153

●購読料、支援金のお振込みは三和銀行渋谷支店　普通預金口座 345-125793　口座名は、「フィラスティン・ビラーディ」です。

定価600円

ISSN 0389-6463